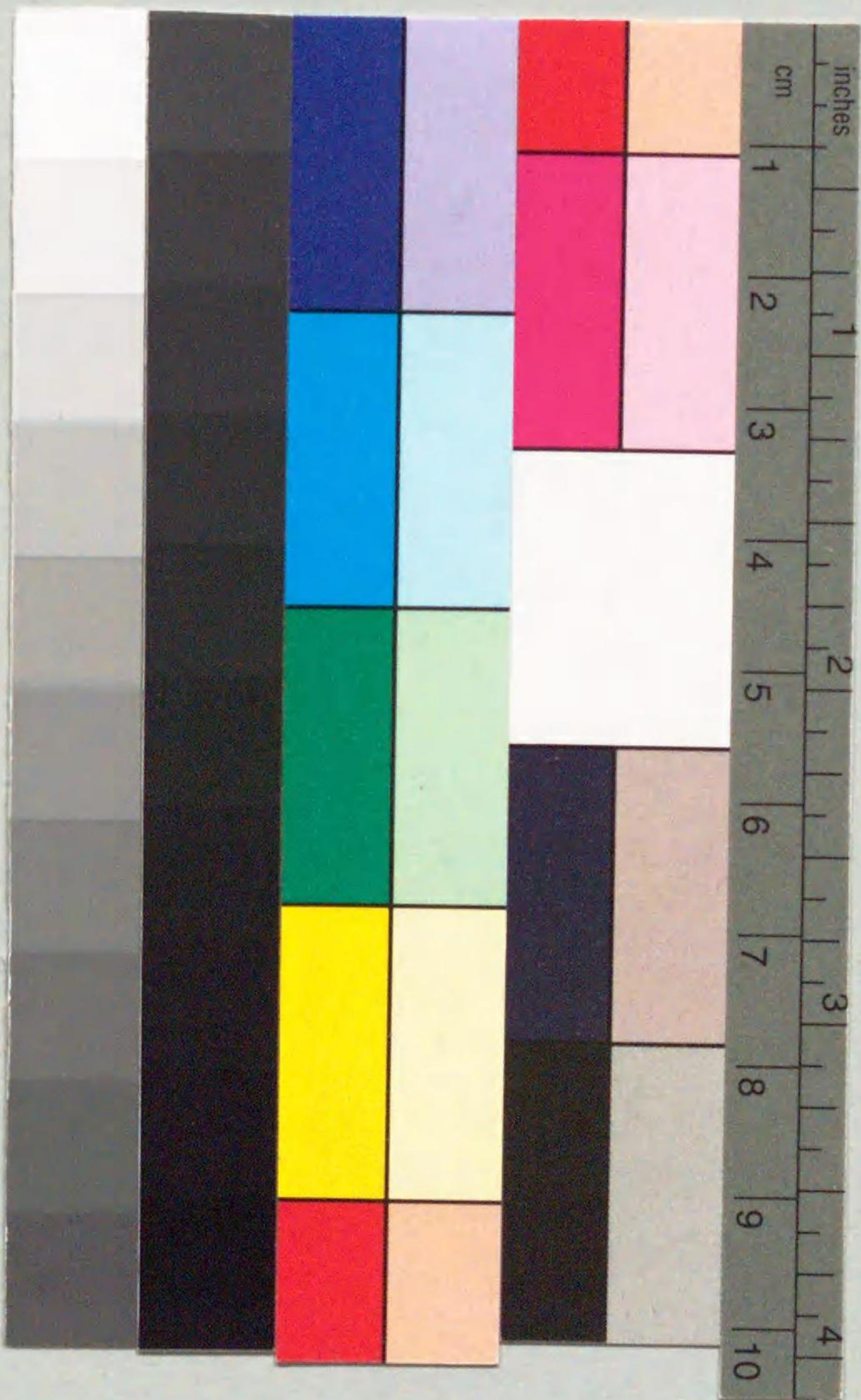


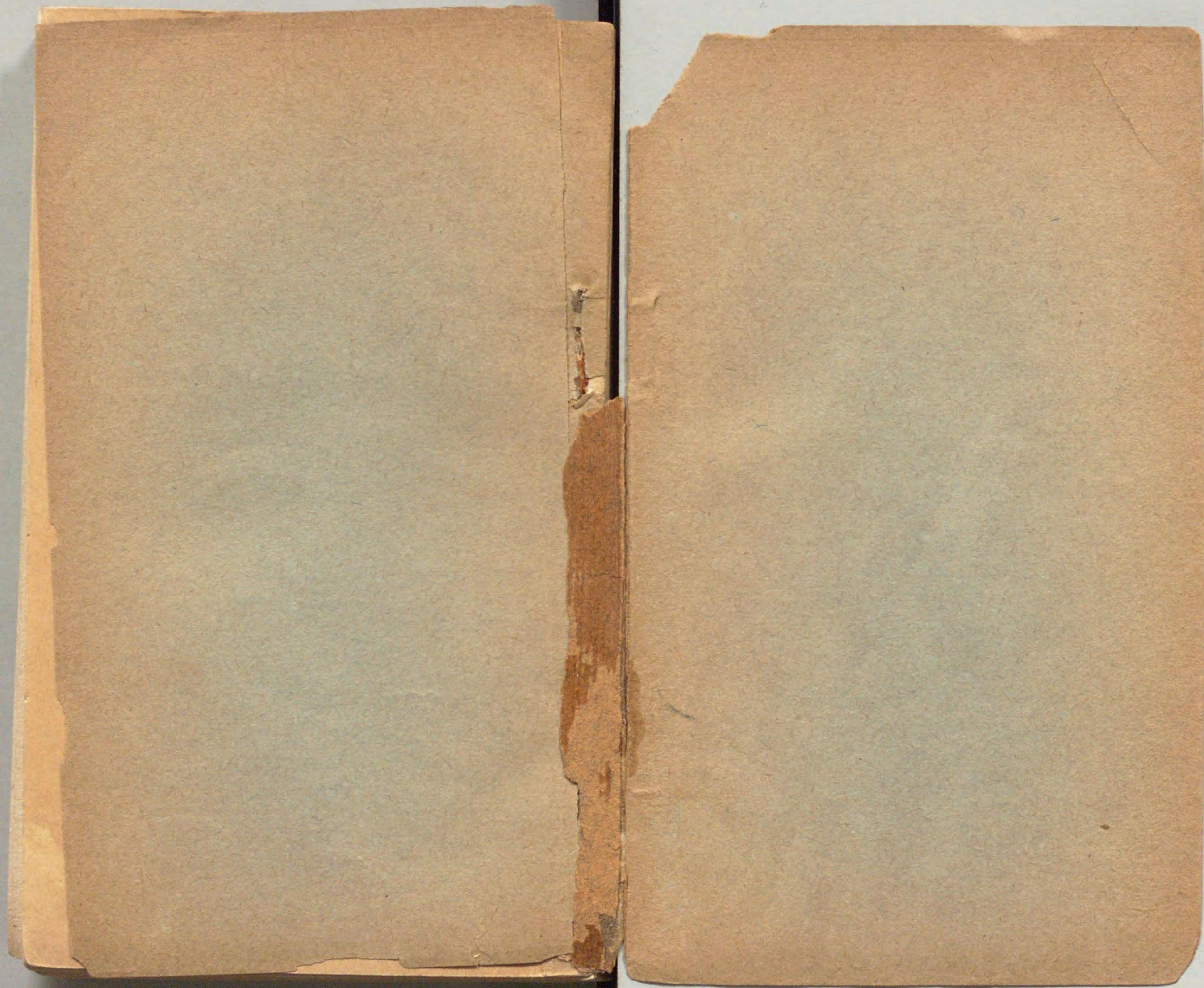
ポケ
ツト

世界お伽噺



270.
171





特63
715

ツポ
トケ
世界
お
伽
嚟

田
中
竹
園
畫

名
知
一
馬
編

明治
45. 5. 14
内交



お加會場大猫も傍聴





お伽噺會場『犬』猫も傍聽

ツボ
トケ
世 界 お 伽 嗺

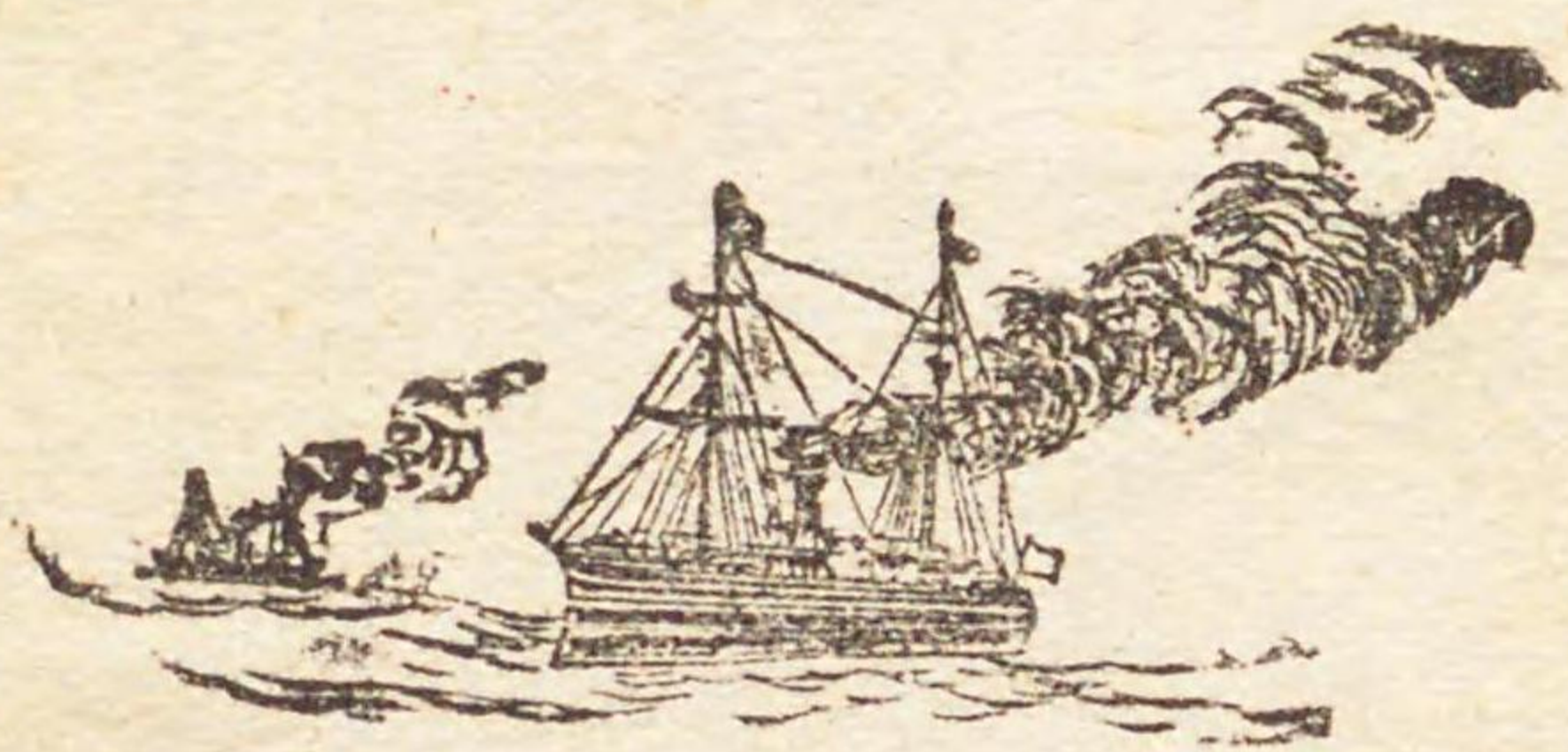


三つの望み

名 知 一 馬 編

昔、米國の或る田舎に、至つて正直な、そして、極溫和しい一人の男が、ありまして、三年の間、或る農夫の家に奉公して、忠實に勤めましたが、主人は、ちつとも給金を呉れませんでしたから、男

三つの望み



三つの望み

は或日主人に向つて、

『旦那様、私もお宅へ来てから三年の間、一生懸命働いたつもりです。どうか、お給金を渡して下さいまし。』

と頼みました。

主人は大の吝嗇家でありましたから三年間の給金として、たつた三個の銅貨を呉れました。

男は、別に不足も云はずに、そのお錢を受取り、これから諸所廻つて、いゝ仕事でも探さうと思つて、主人に暇をもらひ、三個の銅貨を大切にポケットへ入れて、主人の家を出ました。

やがて、村を出はなれて、ある野原へさしかゝると、一人の一寸

法師がチヨロ／＼と遣つて来て、

『ヤア旦那、いゝ御機嫌ですね』

と言葉をかけました。男は元氣よく、

『いゝ御機嫌だとも、三年かゝつてためた給金は持つてるし、身軀は此の通り丈夫だし、これで御機嫌でなくつてどうなるものか、僕はこれから、いゝ儲け口を見附に行くんだ』

と云ひました。すると一寸法師は、悲しさうな調子で、

『ねへ旦那、私は御覽の通りの貧乏人で、今日の生計にも困るやうなわけですが、どうか少しお助け下さるわけには参りますまいか』
と頼みました。男は氣の毒に思つて、大切な銅貨を、三個ともや

三つの望み

三つの望み

つてしまひました。

一寸法師は大さう喜んで、

『どうも有難うございます、おかげで助かりました。ついでに、

お禮のしるしに、何でも、あなたのお望みを三つだけ叶へませう』

と云ひましたので、男も喜んで、

『それは有難い、何を叶へてもらはうかな』

と、少し考へてゐましたが、やがて思ひ附いて、

『それではね君、何でも射てる弓と、鳴らせば面白くなるヴァイ

オリンと、何でも思ひ通りになるお禁厭と、かう三つ叶へて呉れた

まへ』

と云ひ出すと、一寸法師は、

『よろしい、承知しました』

と、直に魔法をつかつて、弓とヴァイオリンとを出して呉れ、お

禁厭の方法も教へて、何所かへ行つてしまひました。

お錢は一文もなくなつたけれども、三つの望みの叶つたので、正

直な男は、得意になつて、ドン／＼行きますと、向う方の木に美し

い小鳥が止つて、好い聲で囀つてゐると、其の下に一人の猶太人が

さも捕へたさうな顔をして、小鳥をみて居ましたが、男の姿を見て

『實に美しい聲のいゝ鳥だ、何程でもお錢をやるから、捕へて呉

れる人はいいか知ら』

三つの望み

三つの望み

と、獨語をいひました。

『こりや面白いぞ』

と、男は心の中で思つて、猶太人の傍へ寄り、

『オイ君、君は大分あの鳥が欲しさうだが、眞實にお錢を澤山呉

れるなら、僕が捕へてあげようか』

と云ひますと、猶太人は、さも嬉しさうに、

『ア、上げるとも、捕へてさへ呉れりや、何程でも上げるよ』

と云ひました。そこで、正直男は、うまく行くやうにと、心の中

でお禁厭をし、弓をもつて木の枝をねらひ、ヒュツと放しますと、

小鳥はパタ／＼と羽ばたきをして、木の周圍に生えてゐた荊の中へ

落ちました。

これを見た猶太人は大喜びで、小鳥を捕へようと思つて、急いで

荊の中へ飛込みましたので、正直男はヴァイオリンを取出して、キ

ユーキユーと鳴らし始めました。

猶太人はヴァイオリンの音を聞と共に、何だか心が面白くて／＼

堪らなくなつて、おかしな手ぶり脚つきをして踊り出しましたが、

荊の中だから堪らない、着物は破れる、身躰は傷だらけになるとい

ふ始末で、

『こりや堪らない、助て呉れ、君どうかヴァイオリンを弾くの

は止して呉れたまへ、僕は何にも悪い事をした覚えはないんだから』

三つの望み

三つの望み

と叫びました。

正直男は、猶太人は残酷な性質で、大の吝嗇家だといふことを、豫てきいて居たから、

『悪い事をしないことがあるものか、今までウンと貧乏人をいちめたくせに』

と云ひながら、いよ／＼はげしくヴァイオリンを鳴らしましたので、猶太人は益々浮かれ出して、踊り狂ひましたから、傷はなほ／＼ふえて、身躰中血だらけになり、

『お錢を出すから赦して呉れ』
と、泣聲で頼みました。

正直男は、こゝだと思つて、

『何程出すんだ』

『一圓出すよ』

と、猶太人は答へた。

『一圓ばかりじゃいやだ』

と、正直男が云つた。

『じゃア五圓々々』

『ごえんがないよ』

『十圓出すよ』

『オットまだ／＼』

三つの望み

三つの望み

『しやうがない、二十圓だ』

『どうして〜』

『五十圓で助けて呉れ』

『まだいめ〜、今少々の奮發だ』

『痛くて〜我慢が出来ない、百圓出すよ、百圓ッ』

『え、面倒くさい、百圓にまけてやらう』

と云つて、ヴァイオリンの手を止めました。

『あゝ、やつと助かつた、どうも君はひどい事をするねえ』

と云ひながら、猶太人は、澁々百圓の金を出して、男に渡しまし

たので、男はそれを受取つて、ポケットへ捻ぢ込み、ズント〜行つ

てしまひました。

ひどい目にあはされた猶太人は、口惜しくて口惜しくて堪らないので、直に近くの役所へ行つて、

『只今、此の先の野原で、背中に弓を背負つて、首にヴァイオリンを掛けた盗賊に出會ひまして、百圓の金を取られた上に、こんなひどい目にあはされました』

と、嘘を吐いて訴へましたので、役所では、それは大變だと、直に大勢の下役人を出して、驚いてる正直男を縛つてしまひました。』

『此の金は、私が此の猶太人にヴァイオリンを聴かせたお禮に貰

三つの望み

三つの望み

つたのです』

と、云ひわけしましたけれども、役人はそれを聴き入れないで、男を死刑にすることに、絞首臺（首を絞めて殺す臺）の傍へつれて行きました。

其の時、男は役人に向つて、

『此の世の別れに、どうか今一度ヴァイオリンを弾かせて下さいまし』

と願ひますと、猶太人は驚いて、

『モシ／＼お役人様、あのヴァイオリンを弾かせては大變です』と、止めようとしたので、正直男は心の中で、かのお禁厭をしま

したから、お役人は、此の男の願ひを聴きとりました。

男は大さう喜んで、ヴァイオリンを弾きはじめますと、役人等も猶太人も、絞首をみよ、と思つて、其所へ集つた人等も、各に心面白くて堪らなくなり、奇妙な形容をして踊り出しました。

そこで男、キエー／＼／＼と、益々はげしく弾きましたので、皆々、狂人のやうになつて、踊つて／＼踊りぬきましたから、身軀は綿のやうに疲れ、ぐら／＼目まひがして、今は死にさうになりました。

役人はとても堪らないと思つて、

『コラ、もう止めろ、早く止めろ、お前の命も助けてやるし、取

三つの望み

三つの望み

上げた金も返してやるから、どうか早く止めて呉れ』

と云ひましたから、正直男は、ヴァイオリン弾手を止めますと、人々はホツと息をつきました。

役人は、猶太人に向つて、

『其方が、訴へたばかりに、ひどい目にあつた、一躰其方はどうして、百圓といふ大金を持つて居るのだ、其のわけを申せ』

と云つて、だんぐり取り調べますと、其の金は、猶太人か、多くの貧乏人をいぢめて、取り立てたもので、眞實、此の男にやつたのだといふ事も、すつかりわかりましたので、役人は大さう怒つて、猶太人に向ひ、

『其方は、ひどい事をして金を取り立てたばかりでなく、偽りの訴へをして、他人を罪に落さうとしたのは、不都合千萬な奴だ』
と云つて、今度は反對に、猶太人を絞首臺へ上げることにして、百圓の金は、正直男に返して呉れましたので、男は、又ヴァイオリンを弾きながら、ぶら〜と出掛けました。

七頭の龍

昔々、西洋の或る所に、二人の兄弟がありました、兄は金持で弟は貧乏でありました。金持の兄は鍛冶屋で、性質が良くありませんでした。貧乏な弟は箒を作つて生計を立て、居ましたが、正直

七頭の龍

七 頭 の 龍

な 苦 しい 人 だ っ た け ゝ っ た。

或 日、貧 乏 な 弟 が、箒 を 作 る に 使 ふ 小 枝 を 切 り に 森 へ 行 き ま し た ら、こ れ ま で 見 た 物 の 中 の ど ん な 物 よ り も 美 し い 金 の 鳥 を 見 附 け ま し た。

そ こ で 弟 は、石 を 拾 っ て、鳥 に 投 付 け る と 都 合 よ く 中 つ て、鳥 は 飛 び 去 る 時 に、翼 か ら、金 の 羽 根 を 一 本 落 し ま し た か ら、弟 は こ れ を 拾 ひ 上 げ て、兄 の 所 へ 持 っ て 行 き ま し た、兄 は そ れ が 純 金 な の を 見 て、澤 山 の 金 を 呉 れ ま し た。

翌 日 又 弟 の 箒 屋 が、枝 を 切 ら う と 思 っ て、樺 の 木 に 登 っ て 居 ま す と、昨 日 の 金 の 鳥 が、其 の 木 か ら た ち 上 り ま し た の で、見 る と、

七 頭 の 龍

巢 が あ つ て、巢 の 中 に は、金 色 の 卵 が 一 個 あ り ま し た。弟 は、其 の 卵 を 取 っ て、兄 の 所 へ 持 っ て 行 き ま す と、兄 は、

『ど う か、其 の 鳥 を 捕 へ て き て も ら ひ た い も の だ な ア』
と 云 ひ な が ら、卵 の 價 値 だ け の 金 を 呉 れ ま し た。

そ れ で、貧 乏 な 弟 は、三 度 目 に 森 へ 行 き ま す と、又、金 の 鳥 が 木 の 上 に 止 っ て 居 る の を 見 附 け ま し た か ら、弟 は、鳥 を 打 落 し て、兄 の 所 へ 持 っ て 行 き ま す と、兄 は、ど つ さ り 金 を 呉 れ ま し た。弟 は 心 の 中 に、

『サ ア、こ れ で 以 て、一 つ 立 派 に な ら う』
と 思 っ て、雀 躍 り を し て 家 へ 歸 り ま し た。

七 頭 の 龍

さて、兄の鍛冶屋は悪賢い男でありましたから、此の鳥が、世界にたぐひのない珍らしいもので、其の心臓と肝臓とを喰べた者の枕の下へは、満一年の間、毎朝々々、大きな金貨が一個づゝ出るといふ、誠に奇躰なものだといふ事を知つて居ましたから、妻に向つて『私一人で皆喰べるんだから、よく氣を附けて、あの金の鳥を焼いてお呉れ』

と云ひ付けました。

妻は鳥を串にさして、火に掛けて置いたまゝ、外の用をしようと思つて出て行つたあとへ、箒屋の子供が入つて来て、串をかへしてゐると、鳥から小さい二切のものが落ちて、下の鍋の中へ入りまし

七 頭 の 龍

た。子供はお腹が空いてゐたから、それを口の中へ入れました。

すると丁度そこへ鍛冶屋の妻が歸つてきて、子供が口を動かしてゐるを見て、何だと尋ねますと、子供は、

『此の鳥から落ちた小さな切れ二つきりよ』

と答へたので、妻は大變驚いて、

『お前はまあ大變な事をおしだねへ、心臓と肝臓とを喰べてしまつて』

と云ひましたが、夫に知れては面倒だと思つて、大急ぎで雛鳥を一羽殺し、其の心臓と肝臓とを取出し、それを焼き、金の鳥と一緒に緒にお皿に載せて、夫の前へ持つて行くと、夫は少とも残さずに喰

七頭の龍

べてしまひました。

そして、翌朝になつて、金貨を引出す心組で、枕の下へ手を入れ
てみたが、こりや怪しからん、金貨所か、鑑一文もない。

そこで箒屋の子供は、何にもわけを知らず、翌朝臥床から起きる
と、何か轉げた物があるので、見ると金貨だ、驚いて拾ひ上げて、
お父さんの所へ持つて行きますと、お父さんも大さう驚いて、

『こりや一躰どうしたわけだらう』

と驚いて居ると。

其の次の朝になると、又金貨が一つ出た、其の次の朝も、又其の
次の朝も出ました。

七頭の龍

餘りの不思議さに、箒屋は、兄に此の話をしますと、兄は直に、
箒屋の子供が、金の鳥の心臓と肝臓を喰べたことを覺つた。一躰兄
は、憐れみの心のない男ですから、ひどく、子供を恨んで、

『そりや、お前の子供は悪魔に取りつかれたんだから、そんな金
には觸るな、そして、早く子供を捨て、しまふがい、さうでない
とお前まで危いぞ』

と脅かしました。

弟は大さう驚いて、かはゆい子供と別れるのを、歎き悲しみまし
たが、仕方がないので、子供をつれて、ある大きな森へ行き、そこ
へ子供を棄て、泣く泣く家へ歸りました。

七 頭 の 龍

子供は大さう怖がり、森の中をあちこちと駆け廻つて、家へ歸る路をさがしたが、其のかひもなく、路は益々分らなくなつた時に、一人の獵師に出會ひました。獵師は、子供に尋ねました。

『お前は誰の子だい』

『私は貧乏な箒屋の子ですが、毎朝、私の枕の下へ金貨が出るもんですから、お父さんは私を此の森の中へ棄て、しまつたのです』

と答へると、獵師は、

『フーム、お参が正直者で、なまけるんでなければ、お前のお父さんのする事はよくないやうだね』

と云つて、親切な獵師は、此の子供をかはゆさうに思ひ、自分に

子供がないから、

『私がお前のお父さんになつて、養育て、あげよう』
と云つて、此の子供を家へつれて歸りました。

それから、此の子は漸々成長して、優れた獵師になりましたが、これから、世の中へ出て、自分の運を試さうと思つて、これを養父に話しますと、養父も賛成しました。

そこで、少年獵師は家を出て、幾年も諸所を廻つた後、或る都會へ來ますと、町には一帯に黒い縮緬が掛けてあるので、獵師は或る宿屋へ入つて、其のわびを尋ねると、此の町端に高い山があり、其の山に一疋の龍が住んで居て、毎年此の町から、少女を一人宛供へ

七 頭 の 龍

七頭の龍

る事になつてゐて、若し供へなければ、龍は國中を荒らすといふこととで、今までに、國中の少女は皆供へてしまつて、王様のお姫様一人残られたけれども、それも、愈々明日龍にお遣りなさる事になつたから、其のお悔みのために黒縮緬を掛けて置くので、是までに、軍人等が幾人も、龍を退治しようとしたけれども、皆龍に命を取られてしまつた。それで王様は、此の龍を退治する者は、お姫様のお婿さんにして、王様の跡繼にしようといふ事と云つてお居でになるといふ事でありませう。

獵師は此の話をきいて、翌朝、かの山へ登つてみると、頂上に小さい社があり、そこに、何か一杯入つた金の盃が三つあつて、其傍

七頭の龍

に、「此の盃は、金の鳥の心臓と肝臓とを喰べた者だけ飲み干す事が出来、其の者は世界一と強者となつて、門の前に埋けてある大きな刀を使ふ事が出来る」と書いてありました。

そこで獵師は、其の盃を飲み干して、門の前に埋けてあつた大きな刀を探し出しました。

程なく、お姫様を龍に遣る時となりましたので、王様始め、大將や身分の高い人々がお姫様を送つて町端まで來ました。お姫様は、山の頂上にゐる獵師の姿を見て、龍が自分を待つてゐるのだと思ひ、大さう怖がつて、地に倒れたが、自分が行かなければ、國が滅びてしまふのだと思つて、心をきめて進みましたので、王様は、大將一

七頭の龍

人残つて、遠くから様子を見届けるやうに云ひ付けて、他の人々をつれてお歸りになりました。

やがて、お姫様が、山の頂上へ来てみると、龍だと思つたのは、一人の少年で、優しい言葉をかけてお姫様を慰め、きつと、私が命を助けませうと云つて、お姫様を社の中へ入れました。

其の時七ツの頭の龍が喧しく呻りながら上つて来て、獵師を見て驚いて尋ねました。

『お前は、おれの山で何をするつもりだ』

『おれはお前を退治に来たのだ』

と獵師が云ふと、龍はハ、と笑つて、

『これまで、そんな事を考へて、命をなくした武士が幾人あつたか知れやしない。それではお前も直に殺してやらう』

と云つて、龍は七ツの口から火を吹き出し、枯草に火をつけて獵師を焼き殺さうとしたので、獵師は直に刀を抜いて草を薙ぎ拂ひ、火を消し止めて、其の刀を以て、龍の頭を三つだけ切り落しました。すると龍は、大聲で吼えながら宙へ飛上り、口から火を吹き出して、獵師に飛び掛らうとしたので、獵師はなほも刀を揮つて、更に三つの頭を切り落し、しまひに、残る一つの頭と尾とを切つて、龍を殺してしまひました。

そこで獵師は、社の戸を開けて見ると、お姫様は氣を失つて倒

七頭の龍

七 頭 の 龍

てゐましたから、外へ連れ出し、色々介抱して正氣に歸らせ、自分が龍を退治したことを話して、其の死骸を見せますと、お姫様は大さう喜んで、

『それでは、あなたは私の夫です』

と云つて、自分の名を書いたハンカチを獵師にやりました。獵師は、龍の七ツの口から一々舌を切り取つて、其のハンカチに包み、地の上に横になりましたが、疲れてゐたので、ぐすり眠込んでしまひました。

先刻から、山の麓で様子を見てゐた大將は、此時のこゝく上つて来て、お姫様を連れて山を下りて、お姫様に向ひ、

『龍を殺したのは私だとおつしやつて下さい、さうでなければ、あなたを殺しますぞ』

と、劍を抜いて脅しましたから、お姫様もしかたなく承知して、お城へ歸りますと、大將は、王様に、

『私が龍を退治したので御座いますから、どうかお婿様になすつて下さいまし』

と申し上げました。

王様は、お姫様が無事でおかへりになつたのを見て、大さうお喜びになり、お姫様に、大將が殺したに違ひないかと尋ねられますとお姫様は悲しさに、

七 頭 の 龍

七 頭 の 龍

『あゝ、私はさう申し上げるより仕方が御座いませませんが、大將を夫にする事は、どうか一週間延して下さいまし』
と頼みました、これは一週間の中に、強い獵師の様子がわかるかと思はれたからです。

さてかの獵師は、五日五晩ぐつすり眠込んで眼を覺したが、傍にお姫様がゐないので、大さう驚き悲しみ、直に山を下りて町へ入ると、一帯に赤い布が掛つてゐたから、先の宿屋へ歸つてきいてみると、先間、大將が龍を退治してお姫様を助けたので、明日は、大將がお姫様のお婿様になる祝日だから、そのしるしに赤い布を掛けるのだとの事に、獵師は更に驚いて、直にかのハンカチをお姫様に送

り届け、私が參らなければ、お祝ひが出来ませんと申し送りました。
『お姫様は、獵師が無事でゐたのを大さう喜んで、明日は、獵師を呼んで下さるやう、父王に頼まれますと、王様は之を許されました。翌日になると、獵師の宿屋へ、王様からお使者が参りましたから、獵師は使者に向つて、

『王の服と、六頭立の馬車と、お傍の家來とを、お遣はし下さいまし』
と頼みました。使者はお城へ歸つて、此の事を王様に申し上げると王様も驚いて、お姫様に尋ねられました。お姫様は、
『何でも、望みの通りにしてやつて下さいまし』

七 頭 の 龍

七頭の龍

と云はれたので、王様は、其の通りにしてやられました。そこで
獵師は、王の服を着、お傍の家來をつれ、馬車に乗つて、王様のお
城へ行きました。すると、王様はお、姫様の言葉に従つて、獵師を
自分とお姫様との間に坐らせられましたから、大將はこれを見て不
思議に思ひながら、お姫様の向うに坐りました。

丁度此の時、七ツの龍の頭を持ち込まれたので、王は一同の家來
に向つて、

『此の大將は、七ツの龍の頭を切つた勇者であるから、今日は姫
の婿にするのだ』

と云はれますと、獵師は、龍の口を開けて、

『其の龍の舌は何所にございます』

と尋ねました。大將はハツと驚いて青くなり、どきまぎしながら
答へました。

『すべて龍は舌のない者であります』

『成程、嘘を吐く者には、龍の舌はわかりますまい』

と云つて獵師は、王様に向つて、

『此の龍の舌が勝利のしるしでございます』

と云ひながら、持つて來た七ツの舌を取出して、一ツ／＼口にあ
てました所、どれも、チャンとはまりましたから、獵師は、王様に
自分が山の上で龍を退治したことを申し上げますと、王様も大さう

七頭の龍

七頭の龍

驚かれて、お姫様に、

『此の者が龍を殺したに違ひないのか』

と尋ねられました。お姫様は、

『眞實、それに違ひございません』

と答へられたので、大將の悪計もすつかりあらはれました。

王様は、直に、十二人の裁判官を呼んで、大將の罪を定めさせられますと、裁判官は大將に死刑を申しわたしました。

そこで、王様は、獵師をお姫様のお婿様と定められ、お祝ひの式を擧げられました。

其の後、此の若い王子は、實の父の箒屋と、養父の獵師と、宿屋

の主人とを呼んで、澤山のお金や品物をやりました。

不思議な壺

昔々、ペルシアといふ國のある村に、一人の年老つた漁夫があつて、日々網で魚を捕へて、やうやく、妻と三人の子供とを養つて居ました。

或る日、日も暮に近い時分、漁夫は、ある海邊で網を打つと、どつしり手ごたへがありましたから、大きな魚でも掛つたのであらうと、大さう喜んで引き上げて見ましたところ、魚ではなくての馬の死骸でありましたから、漁夫は大いに驚き、且落膽して、しばらく

不思議な壺

不思議な壺

は其の死骸をながめてゐました。

やがて又網を打つと、何も獲物がなくて、石と砂利ばかりでありましたから、漁夫は又落膽しましたが、今度こそはと思つて、三度目打ちましたけれども、又もや、石と砂利ばかりで、小魚一つかゝりませんでしたから、漁夫は涙をこぼして口惜しがり、砂の上に跪まづき、手を合せて天を拜んで、

『神様、どうか、私の貧乏なのを憐れと思し召して、今度こそは食料の資を得させて下さいまし』

と祈つて、四度目の網を下しました。すると、又しつかり手ごたへがありましたから、漁夫は、何が掛つた、らうと、胸を跳らせな

がら、引き上げてみると、今度も魚ではなくて、一つの銅の壺で、口は鉛の板で固く閉ぢてありました。

漁夫は落膽しながらも、不思議に思つて、ふところから小刀を取り出して、鉛の蓋をこちあけて見たが、何にもなく、たゞ、中から一條の黒烟が濛々と立ち昇つて、それが天にといいたかど見る間に、天は俄に暗く曇り、海岸は靄に包まれました。

漁夫は大さう驚いて、これは、どんな事が起るかも知れないと思つて、怖れてゐますと、やがて、煙の中から、不思議な形をした妖怪が現はれて、

『ソロモンよ赦せ、私はあなたの命令は、もうそむきません』

不思議な壺

不思議な壺

と叫びました。ソロモンといふは、昔の豫言者（卜者のやうなものの）であります。

妖怪は更に漁夫に向つて、

『氣の毒だが、お前の命はおれが取るぞ』

と云ひました。

漁夫は慄へ上つて、青くなり、

『何故、罪もない私の命を取るのですか』

とたづねました。すると、妖怪は、

『おれは天に住む悪魔で、ソロモンの命令を聴かなかつたから、

ソロモンは怒つて、おれを此の壺の中へ入れて、海の中へ沈めてし

まつた。そこでおれは、これから百年の内に此の壺の蓋を開けて、おれを助けて呉れる人があつたらば、其の人には、澤山な富を授けて、子孫代々安樂に暮させようと決心した、けれ共、百年の内に、何人も壺の蓋を開ける者はなかつた、それで今度は、又百年の内に助けてくれる人があつたら、大きな國を授けて、其の人を大王にしてやらうと思つたけれども、壺の蓋を開ける者がなかつた。これも助ける者がなければ、今度百年の内に、此の壺の蓋を開く者は、直に殺してしまはうと、おれは斯う決心したのだ。所が、お前は、此の年限の内に、蓋を開けたのだから、かはいさうだが、殺されなければならぬ』

不思議な壺

不思議な壺

と悪魔は荒々しく云ひました。折角助けてやつて、殺されるなんて、こんな詰らない話はないけれども、何しろ、相手が悪魔ですから仕方がありません。

そこで漁夫は悪魔に向つて、

『あなたは此の壺の中にお居でになつたとおつしやるけれど、それは嘘でせう、若し、眞實にお居でになつたものなら、私の眼の前で、もう一度入つて見せて下さいまし』

と云ひますと、悪魔はケラケラと笑ひ出して、

『疑ひ深い人間だなア、おれは神の力をもつて居るから、身体をのばせば、天地にひろがり、之れを縮めれば、僅三寸位の壺の中へ

入れるのだ、これは決して嘘ではないと云ひました。漁夫はそれでも承知せず、

『若しそれが眞實ならば、其の術を眼の前で見せて下さいまし、其の後で、私の命を差し上げませう』

と云ひますと、

『よし、それでは見せてやらう』

と悪魔は、魔法をもつて、壺の中へ入り、姿を匿してしまひました。

漁夫は、しめたと思つて、思はず手を拍きますと、悪魔は壺の中

不思議な壺

『どうだ、疑ひが解けたか、解けたら出るぞ』

と云ひました。出られては大變と、漁夫は、いきなり鉛の板を取つて、壺に蓋して、しつかりと貼付け、悪魔に向つて、

『コラ悪魔奴、今度は、お前がおれに助けを乞ふ番になつたが、もう斯うなつては、殺すも生すもおれの自由だ、しかし、殺すのもかはいさうだから、此のまゝ、元のやうに海へ投げ込んでやらう』
と云ひますと、悪魔も、まんまと漁夫に欺されて、壺の中へ入つたのを後悔しましたが、もはや出る術もありませんから、何とか漁夫を欺して出ようと思つて、優しい聲で、

『どうか、もう一度出して下さい、さうすれば、何でも、お前の

思ふ通りにしてあげるから』

と云ひましたけれども、漁夫はこれを聞き入れず、

『お前は壺の中に居て楽しむがいゝ、今私がお前に話してきかせる事がある』

と云つて、昔ゾーマンといふ國の王が、ドーバンといふ醫者に病氣をなほしてもらつた後、ドーバンを殺したけれども、ドーバンの計略によつて、自分も死んだ事を話し、

『此の王様も、ドーバンを殺さなかつたら、自分も死なすにすんだのだ。お前も、私が助けた恩を忘れて、私を殺さうとすれば、神様の罰で、お前も死ななければならぬぞ。いくら、お前が巧い事

不思議な壺

不思議な壺

を云つても、欺されてたまるものか』

と云ひました。

悪魔も困りはて、歎き悲しみながら、

『コレ漁夫よ、私は神様に誓つて嘘を云はない。私は決してお前を殺さぬばかりでなく、お前に澤山のお金をまうけさせるから、どうか今一度出して下さい』

と云ひますと、漁夫も、

『お前が神様に誓つて嘘を云はないのなら、出してやらう』

と、再び壺の口を開くと、又黒い煙が出て、先の悪魔が現はれ、漁夫に向つて、

『約束通り、お前にお金まうけを教へるがら、私についておいで』と云つて出掛けましたから、漁夫は悪魔について一里程行くと、一つの池のほとりに出ました。池の水は美しく澄みわたつて、中には、白紅青紫の四色の魚が、ちよろ／＼と遊んで居ました。悪魔は、魚を指して、

『コン漁夫よ、お前此の魚を捕つて國王に差上げれば、金や寶を下さるであらう、けれど、一日に一度しか網打つてはいけないよ』と云つて、悪魔は右の足でトンと地を蹴ると、忽ち大きな穴があいて、悪魔の姿は、穴の中へ入つて、見えなくなつてしまひました。漁夫はアツと驚いたが、やがて、悪魔の教へに従つて、その四疋

不思議な壺

不思議な畫

の魚を捕へ、少し距つた國王のお城へ持つて行つて差し上げました。
 すると、國王は、大さう喜ばれて、四百兩のお金を下されたので
 漁夫は大喜びで家へ歸りました。
 其の後で、料理人は、王様の命令に従ひ、四疋の魚を煮ようと思
 つて、魚を鍋の中へ入れますと、不思議にも、お厨房の壁が破れて
 中から一人の美しい女が現はれ、杖で鍋の中の魚を叩いて、又元の
 壁の破れ目へ入りました。料理人は不思議に思つて、鍋の中を見ま
 すと、魚は皆眞黒に焦げてゐましたので、料理人はびつくりして、
 泣きながら、これを宰相（總理大臣のやうな人）に告げたので、宰
 相は、直にかの漁夫を召し寄せて、再びかの魚を持つて来いと云付

けました。

漁夫は、かの魚は一日に一度しか捕れませんか、翌日又かの魚
 を捕へて、お城へ持つて行き、又お金を貰つて歸りました。

料理人は、又其の魚を煮ようと思つて、鍋の中へ入れますと、又
 前のやうに女が出て来て、杖で叩きましたから、魚は又黒焦げにな
 りました。

宰相は、又此の事を見聞して、これを王様に申し上げますと、王
 様も誠に不思議に思はれ、又もや漁夫に云付けて、翌日かの魚を取
 寄せ、自内で見居て、料理人に、魚を鍋の中へ入れさせられます
 と、壁が破れて、かの女が現はれ、鍋をひつくりかへして行きまし

不思議な畫

不思議な壺

た。

王様は、これを見て驚き又不思議に思はれ、これは何か悪い事のある兆であらうから、自分で實地を見届けようと、彼漁夫を召し寄せ、案内させてその池のほとりへおいでになりました。けれども、何も變つた事がありませんから、王様は、漁夫を返して、御自分一人で、一里ばかり山の中へ入られると、立派な御殿がありまして、王様は薄氣味悪く思ひながらも、中へ入られますと、十五六歳の少年が、しく／＼泣いてゐましたから、王様は、其のわけを尋ねられました。

すると少年は、自分は此の黒鳥といふ所の王である事や、此の御殿の中に、悪者と魔法使ひの女とがゐて、女が始終自分を打つたりいぢめたりする事や、魔法で、自分の腰から下を石にした事や、人間を、白紅青紫の四色の魚にして、あの池に入れて置くことなどを話しました。

王様は、これをきいて、少年をかはゆさうに思はれ、其上かの魚の事もわかり、壁を破つて出たのも、此の魔法使ひの女である事もさとられたので、どうかして、此の者等を退治しようと思つて、勇氣を起して、御殿の奥の方へ進まれますと、一つの室に悪者が眠つて居ましたから、王様は腰の劍を抜いて、悪者の首を切り落し、死骸を窓の下の池の中へ投げ込み、御自分で、悪者の臥床へ入つて居ら

不思議な壺

不思議な靈

れますと、魔法使ひの女が、悪者だと思つて、傍へ寄つて來ましたので、王様はすかさず、劍を以て、女の咽喉を突いて、殺してしまはれました。

これで、魔法も消えてしまつたので、少年の腰から下も、元の通りになほりました。

少年は大さう喜んで、今までは魔法で、近く思はれて居たが、實は、王様の國と、此の黒島とは、遠く離れてゐることを話し、又自分を王様の養子にしたいと頼みました。

王様は、快くこれを承知せられ、少年の家來の者等に云付けて、此の御殿に貯へてあつた金銀や、色々の寶物を、百疋の駱駝に積ま

せ、少年や家來をつれて、御自分のお城へ歸へられ、かの漁夫に、澤山の褒美をやつて、かはゆがられましたから、漁夫は、まことに幸福な身分になりました。

醫者の首

前のお話の序に、 Zimmerman 王のお話しをしませう。

昔々、ヘルシアの Zimmerman といふ所の王はある病ひにかゝられて、どんな良い醫者がみても、どんな良い藥を用ゐても、中々なほりませんでした。

其の頃、隣の國に、ドーバンといふ、學問の博い醫者があつて、

醫者の首

醫者の首

或る時此の國へ来て、ゾーマン王が、なほり難い病ひにかゝつて居られることを聴き、自分で王のお城へ行つて、のみ薬も、ぬり薬も用ゐずに、王様の御病氣をなほして上げませうと申しました。

王様は大いに喜ばれて、それでは、お前にたほして貰はうと云はれたので、ドーバンは一旦自分の家へ歸つて、柄の中の空虚な木槌をこしらへ、其の柄の中に、ある薬をしこみ、これをもつて、再びゾーマン王のお城へ参り、王の御前へ出て、

『私の療治の仕方は、別にむづかしくは御座いません。只今此の木槌を差上げますから、王様は運動場へお出でになつて、毬の遊びをなさいました後、此の木槌を縦横に揮つて、運動場を駈けてお歩

きなさいまして、お身躰に、充分汗が出ました時に、お湯にお召しなさいまして、お眠みになりますれば、御病氣は必ずなほります』と、言葉も叮嚀に申し上げました。

王は、不思議に思ひながらも、

『そんな事なら、わけもない事だ。それでは、直にやつてみよう』と、それから直に運動場へ出て、ドーバンの申し上げた通りにして、十分運動せられると、木槌の柄にしこんである薬が、だんく外へ出て、王の身躰に浸みわたりましたので、王は、お湯に入つてきれいに身躰を洗つて、眠れましたところ、其の翌日になると、ドーバンの云つたとほり、すつかり病氣は快くなりました。

醫者の首

醫者の首

王は、天にも昇る喜びで、金三千兩と、其の外色々の珍らしい寶物とを、褒美としてドーバンに賜はり、厚くドーバンを待遇なされました。

ところが、此の國の總理大臣は、誠に心の良くない人で、ドーバンが、王から澤山の御褒美を戴き、厚く待遇なされるのを見ては、羨やましくて堪らなくて、或る日、王に向つて、

『あのドーバンといふ奴は、誠に悪い奴で、魔法をもつて王様を殺して、此の國を奪ひ取らうとして居りますから、あんな者は、早く殺してしまひにるるが宜しう御座います』

と申し上げました。けれども、王は賢い方でありますから、大臣

の言葉に欺されず、

『それは間違つて居る。ドーバンは決してそんな悪い者ではないお前は、餘り人を疑がひ過ぎて居るやうだが、王がこれから、無暗に他を疑がつてはいけないといふ話しを、お前に聽かせてやらう』と云つて、次のやうなお話をせられました。

昔、或る所に、睦じい夫婦の者があつたが、或る日、夫が散歩に出で、一羽の鸚鵡を見付け、この鳥を飼つて、自分の留守の中に、家内の者等が、どんな事をするかをきかうと思つて、其の鳥を捕へてきて、かはゆがつて飼つて置きました。

すると、鸚鵡も、主人の命令をよく守つて、主人の留守の時には

醫者の首

醫者の首

妻の行ひの悪いことや、召使ひの者等の騒がしいことなどを見聞きして、主人に話しました。

妻は、大さうこれをうるさがつて、此の鸚鵡を懲らしめてやらうと思ひ、或る日夫の留守の時、鸚鵡の眼の前に鏡を立て、其の傍で火を縦横にふり動かして、ピカ／＼閃めかせて見せ、耳の邊でゴロ／＼と石臼を挽き、籠の上から、ジャ／＼と水を掛けました。

鸚鵡はこれを、電光が閃めき、雷が鳴り、夕立がしたのだと思つて、翌日、主人の歸るのを待つて、此の事を話しましたから、主人は不思議に思つて、そんな事は無いはずだが、これは、此の鳥の作り事であらうと思ひ、鸚鵡を殺してしまひました。

其の後、主人は、隣の人から、妻の行ひの良くない事や、召使ひ等の横着な事を聴いて、先に鸚鵡を殺したことを、ひどく残念に思つたといふ事である。と王様のお嘶に、

悪い大臣は、王に向つて、

『鸚鵡のお話は、誠にもつともでございますけれど、ドーバンの事は、王様のお身の上にかゝはる大事で、鳥の生死とは比べものになりませんから、災ひの起らない前に、ドーバンを殺した方がよろしうございます。若し私の申す事をお聴き入れがない時には、私の罪となつて、私は昔或る國の宰相が受けたのと同じ罰を受けなければなりません』

醫者の首

醫者の首

と云つて、次の話しを述べました。

昔、或る國の王子は大さう獵が好きで、毎日野山に鳥獸を狩つて
樂しまれました。或る日、王子は何時ものやうに山狩りをして道に
迷ひ、家來の者と離れて、深い谷へ入りましたから、困つて、ふと
前の方を見ると、一人の美しい女がゐて、今日馬に乗つて、野原へ
遊びに出て、うとく睡つてゐる内に、こんな山奥に取り残された
のですが、どうか、私を山の麓まで送つて下さいましと云ひました
から、王子は承知して、女を馬の後に乗せ、道を求めて、山の麓ま
で來られると、ある家の前で、女は馬から下りて、今日は一人の男
をつれて來たから、子供等早く喰べよと云ひましたから、王子は、

ひどく驚いて、これは印度の人喰ひ鬼の類であらうと、大さう怖れ
て、馬に鞭をあて、一生懸命駆け出しました。やがて、お城へ歸
つて、お王上に此の話をせられると、父の王は、これは宰相の不注
意だといつて、宰相を殺させたといふ事でありませぬ。
悪い大臣は、此の話しをして、

『此の通りで御座いますから、只今の中にドーバンを殺さなけれ
ば、ドーバンは必ず王様を殺します。さうなれば、私の不注意にな
つて、私も罰を受けなければなりません』
と云ひましたから、王様も、大臣の言葉に従つて、ドーバンを殺
すことにきめて、ドーバンを召し寄せられ、

醫者の首

醫者の首

『今日お前を呼んだのは、お前の命を貰ふためだ』

と云はれますと、ドーバンは大いに驚いて、

『私は殺されるやうな悪い事を致しました覚えは御座いません』

と、申しわけをいたしましたけれども、王様は赦されませず、家來に

云ひ付けて、ドーバンを打たせられましたので、ドーバンは、血に

染つて苦しみながら、

『あゝ恨めしい王様、今は何と云つてもしやうがありませんが、

私の家に珍らしい書があります、王様が之を取りよせて御覧にな

つて、六枚目になつたら、私の首にお尋ねなさいまし、私は王様の

お尋ねにお對へをしませう。只今、罪もない私をお殺しになれば、

王様にも神様の罰があたる事をお忘れなさるな』

と云ひ終つた時、王はドーバンの首を打ち落されました。

やがて王様は、ドーバンの家から、珍らしい書を取りよせて、初

めからひらいて、六枚目になりますと、白紙でありますから、王様

はドーバンの首に向つて、

『これは、白紙ではないか』

と云はれると、ドーバンの首は、

『そんでは、もう少しお繰り開きなさいまし』

と申しましたから、王様は、なほ二三枚繰つてゆく内に、くらく

と目まひがして、バツタリ倒られました。これは、ドーバンが、

醫者の首

書の紙に、毒薬を塗つて置いたからであります。

此の時、ドーバンの首は、微かに笑つて、

『國王よ、定めて苦しいでせう、今こそ、神様の罰がわかりまし

たか、罪もない私を苦しめた報いは其の通りです。世に馬鹿な國王

等は、これに懲りて、罪もない人民を苦しめるなよ』

と云ふか云はぬかに、王様は死んでしまひ、續いて、ドーバンの

首も息が絶えました。

折角受けた恩を忘れて、仇するやうな者には、必ず悪い報いが來

るにきまつてゐます。

太陽と風

或る時、太陽と風との間に、何方が偉いかといふ争ひが起りま

した。其の時太陽が、

『それでは、今下を通る旅人の外套を脱がせた方を勝としようじ

やないか』

と云ひますと、風もこれに賛成しました。

そこで、先づ風が、ありたけの力を出してブー〜ビュー〜吹

きはじめますと、旅人は寒くて堪らないので、外套のボタンをしつ

かり掛けてしまひましたから、風は、どうしても外套を脱がせる事

が出来ませんでした。

太陽と風

奇妙な行列

次に、太陽が雲の間から、にこ〜笑ひ出て、きら〜と光り輝き、旅人の身軀をあたゝめますと、旅人は身内がポカ〜と温になつて、外套を着て居られなくなりましたので、つひに脱いでしまひましたから、太陽の勝になりました。

奇妙な行列

昔、西洋の田舎に、百姓の夫婦があつて、三人の男の子をもつてゐましたが、どういふわけだか、夫婦とも、末の子を、ちつともかはゆがりませんでした。

或日、上の子は、お父さんに云ひ付いられ、お母さんから、お

しい酒と饅頭とを澤山貫つて、近くの森へ薪を採りに出掛けました。やがて、森へ着くと、一人の小さい老爺さんが出て来て、『お早う御座います。私は、お腹がすいて堪りませんが、どうかあなたの御馳走を、少しわけて下さるわけにはまゐりませんか』と頼みましたが、此の子は吝嗇ですから、『お前に上げると、私の喰べるのが少くなるから、氣の毒だが上げられないよ』

と云つて、ズン〜森の中へ入つて、薪を切りはじめましたが、僅なはずみで、斧で足を切り変したから、仕事をする事が出来なくなり、跛ひき〜家へ歸りました。これは、前の小さい老爺さん

奇妙な行列

が、何にも呉れなかつたのをうらんで、怪我をさせたのであります。
次の日には、中の子が、お父さんに云ひ付けられて、薪をとりに行きますと、お母さんは、又、酒と饅頭とを呉れました。

此の子が森に着きますと、又、小さい老爺さんが現はれて、御馳走を下さいと頼みましたけれども、此の子も、兄さんと同じやうに吝嗇家ですから、老爺さんの頼みをきかないで、森の奥へ入つて、薪を切りにかゝりますと、矢張り兄さんと同じやうに、斧で足をきづ、けましたから、仕事が出来ないで、跛ひきながら家へ歸りました。

其の次の日、末の子はお父さんに向つて、

『お父さん、今日は私が薪を採りに行きませう』

と云ひますと、お父さんは、

二人の兄さんが、斧で怪我をしたのに、お前なんぞが行つたつてだめだから、よした方がいゝ』

と云ひました。けれども末の子は、どうしても行きたいと云つて無理に頼みましたから、父も濫々承知して、

『それ程に云ふのなら、やつてもいゝが、お前も、足に怪我してくるがいゝ』

と云ひました。

末の子は喜んで、支度をしますと、お母さんは、腐りかゝつたど

奇妙な行列

奇妙な行列

ールと、乾いた、まづいパンとを呉れました。

末の子は、それをもつて、森へ行きますと、例の小さい老爺さんが出て来て、

『モシ、私は咽喉が渴いて、お腹が空いて堪りませんが、どうか、飲むものと、喰べるものを下さいませんか』

と頼みました。

末の子は、氣の毒に思つて、

『老爺さん、僕は、腐りかゝつたビールと、まづい、乾いたパンとを持つてただけだが、こんな物でもよければ、一緒に喰べませう』と云つて、包みを開いて見ると、これは不思議、中からは、おい

しい酒と饅頭とが出ましたので、二人は喜んで、飲んだり喰べたりしました。

其の時、老爺さんは、末の子に向つて、

『誠に有難うございました、お蔭で私は助かりましたから、御返禮にいゝ事を教へませう』

と、彼方の大木を指示して、

『あの木を根元から切つて御覧なさい、良い物が出るから』と云つたかと思ふと、老爺さんの姿は、パツト消えてしまひました。

末の子は、不思議に思ひながら、老爺さんの教へて呉れた木を、

奇妙な行列

奇妙な行列

根元から切り倒しますと、木は大きな空洞になつてゐて、中から、かはゆらしい一羽の鶯がばたくと羽はたきをしながら出て來ました。

末の子は、直にそれを捕へて、家へは歸らないで、そこから旅へ出て、ある土地の宿屋に着き、しばらく此所に足を留めました。

すると、此の土地の頭に、三人の娘があらまして、何時か、此の子の持つてゐる金の鶯を見て、尾羽一本でも欲しいと思ひました。

或日、上の娘は、此の子の傍へ來て、

『どうか私に尾羽一本頂戴な』

と云ひながら、手を出して、尾羽を抜かうとしますと、手が鶯

の尾にくつゝいて、どうしても離れません。

其所へ中の娘が來て、姉と同じやうに、鶯の尾羽を抜かうとして、手が姉の身軀にさはりますと、其のまゝくつゝいて、いくら引

張つても離れません。

今度は末の娘がきて、姉二人が、鶯の尾羽を抜いて居るのだと思ひ、自分も一本抜かうと思つて、中の姉の背後から手を出すと、手が身軀にさはりましたから、矢張り其のまゝくつゝいて、離れなくなつたので、三人はしかたなく、其のまゝ、夜を明しました。

翌朝、末の子が、鶯を抱いて宿を出ますと、三人の姉妹は手がくつゝいてゐるので、どうしても引張られて行くより外に仕方があ

奇妙な行列

奇妙な行列

りませんでした。

末の子は、ドン／＼歩いて、ある野原にさしかゝりますと、一人の僧侶が来て、此の奇妙な行列を見て驚いた拍子に、チョツと、手が、一番後の末の娘にさばりますと、矢張り其のまゝくつゝいたので、びつくりして、とらうとしましたが、離れませんから、これも其の儘引張られて行きました。

すこし行きますと、此の僧侶の弟子が来て、此の不思議な行列の最後に、師匠が居たので、氣違ひにでもなつたのかと思ひ、びつくりして、法衣の袖を捕へて引戻さうとしますと、これも其儘くつゝいてしまつたので、同じく引摺られて行きました。

又少し行きますと、二人の工夫が、鶴嘴をかついで來掛りましたので、弟子の僧侶は、

『どうか此の手を離して下さい、後生ですから取つて下さい』
と、泣かないばかりに頼みましたから、工夫等は、引離してやらうと思つて、弟子の僧侶を捕へましたので、又、二人ともくつゝいてしまひ、男女合せて七人の人等が、泣いたり叫んだりして、末の子と鶯鳥とに従つて、又とない奇妙な行列をつくつて歩きました。
末の子は、此の七人の者等をつれて、漸々進んで、やがて或る都會へ入りました。

所が、此の都會に居られた此の國の王様に、至つて陰氣なお姫様

奇妙な行列

奇妙な行列

があつて、これまで、ちつとも笑つたことがなく、毎日心配さうな顔ばかりしてゐましたので、父の王は大さう心配して、お姫様を笑はせた者は、お婿様にするといふお布令を、國中へ出されました。これをきいた末の子は大さう喜んで、丁度お姫様が、お城の窓から外の景色をながめてお居になつた時、此の奇妙奇天烈な行列をつれて、窓の下を通りました。がやゝ騒ぐ聲に、何事であらうと、お姫様が、窓の下をながめられると、お目に止つたのは、此の變挺な行列で、如何に陰氣なお姫様でも、これを見てはつひ可笑しくなつて、思はずオホ、と笑はれました。

それで、末の子は、お姫様のお婿様になつて、後には國王となり、楽しく暮しました。

鼠の御馳走

或る時、家の鼠が、森の鼠の所へ遊びに行きました。森の鼠の家は、樅の木の根元にありましたが、家の鼠が來ましたので、家を片附けて、きれいに掃除をし、晝食には、草の根や木の芽を取つてきて御馳走しました。

すべて、他家で御飯を戴く時には、どんな物を出されても、嗜好なやうなふりをしてゐなければならぬものですから、此の時、家

鼠の御馳走

鼠の御馳走

の鼠も、粗末な食物を出されたけれども、出来るだけ忍耐して喰べましたが、それでも、平常ほどは喰べられませんでした。

やがて御飯もすみました後、森の鼠は、明日、家の鼠の所へ遊びに行くことを約束しました。そして、其の翌日、約束通りにしました。

家の鼠の家は、穀物蔵の中にありました。家の鼠は、玉蜀黍や小麦やパンや、菓子くわしの碎屑くたけを出して、森の鼠に御馳走しました。

森の鼠は、今まで一度も、こんな御馳走を見たこともありませんから、

『あなたは、何所で、こんな結構な御馳走を取つてお出でになつ

たのです』

と尋ねました。すると家の鼠は、

『こんな物は、此家のお厨房へ行けば何程も有りますし、お厨房へ入るにも、わけはないんですよ』

と答へました。

森の鼠は、さも羨ましさうに、

『あなたはお幸福ですね、こんな御馳走ばかり召し上つて居らして、私なんぞ、あんな所に住んで、年中まづい物ばかり喰べてるんですから、眞實につまりません。それを思ふと、私は、あんな所に居るのが、いやになりました』

鼠の御馳走

と云ひました。

丁度、其の時に、ガサ／＼と、藁をふみこえて来る足音がしました。

『静かに、静かに、猫が来るやうです』

と、家の鼠が云ひました。

そこで、二疋の鼠は、ちつと息を殺して、

小さくなつてゐますと、忽ち一疋の猫が、二疋の頭の上の所へ来て止りました。

『主人の穀物藏の中にあるお前等は何者だ』
と、猫が尋ねました。

『たつた二疋の小鼠です』

と、家の鼠が答へました。

『一鉢お前等は、こゝで何をしてるんだ』

『たい、一寸、御飯を喰べてたばかりです』

『お前等は、此の穀物を喰ひ盡してしまふのだらう』

『いゝへ、どうしまして、ほんの、こぼれてゐましたのを、少々』

拾ひましたばかりで御座い升』

『嘘ばかり云つてる、太い奴等だ、サアこれから、お前等を取つ』

て喰つてしまふぞ』

家の鼠は、あはて、

鼠の御馳走

鼠の御馳走

『どうか命ばかりはお助け下さい、私がお話すること
が御座いますから』

と云ひました。

『それじゃあ、聞いてやろう』

と猫が云ひました。

そこで、家の鼠は猫に向つて、

『或る所に、一羽の奇麗な小鳥がありました、床を掃除する時に
錢を一錢拾ひました。小鳥はそれで肉を一片買ひましたら、一度喰
べるだけ充分ありましたので、それを、暖爐の上で煮て、火傷しな
いやうに、入りの所に冷して置きました。すると、そこへ一疋の犬

が来て、肉を取つて喰べてしまひました』

と云ひますと、猫はすかさず、

『それでは、俺も其の通りに、お前等を取つて喰はう』

と云ひました。

そこで、森の鼠は、すばやく逃げ出して、樅の木の根元の、自分
の家へ歸りましたが、餘りの怖ろしさに、お腹が空いて、ひよろひ
よろになるまで、外へは出ませんでした。そして、もう二度と再び
家の鼠の所へ遊びに行かうとは思ひませんでした。

さて、家の鼠はどうなつたでせう、それは、諸子の想像に任せて
置させうが。キット命はないでせう！

鼠の御馳走

正直靴屋

正直靴屋

昔、西洋の或る町に、一人の靴屋がありました。仕事もかなり上手で、其の上、誠に正直な人で、近所でもほめられておりましたが、どういふわけだか、商賣が繁昌しないので、日々の生計を立てるにも困る所から、ポツ／＼家の道具までも賣つて、細々と暮してゐましたが、終にはそれも少なくなつて、或晩には、やつと、一足の靴を作るだけの革が残りました。

靴屋は、翌朝早く起きて仕事するつもりで、その革を裁つて、仕事臺の上に置き、其の晩は臥床に入つて、別に不足とも思はないで

静かに眠りに就きました。

翌朝早く臥床を離れた靴屋は、先づ神様を拜んで、仕事臺の所へ来てみると、アラ不思議や、昨晚の革は、スツカリ一足の靴に出来上つて、チャンと臺の上に並んでおりましたので、大さう驚いて、手に取つてみると、縫ひ方から形状まで、實に申し分なく立派に出来ておりました。

靴屋は驚きながらも、大さう喜んで、その靴を店へ出して置きますと、一人の客が来て、それを手に取つてみて、

『これは良い靴だ、スツカリ氣に入つた』

と云つて、普通よりはズツと高い代を拂つて買つてゆきましたか

正直靴屋

正直靴屋

ら、靴屋はそれで二足分の革を買つて、其の晩方、それを裁つて朝早く起きて、靴に作り上げるつもりで、仕事臺の上に置いて眠みました。そして、翌朝早く起きてみると、昨日の通りの立派な靴が二足、チャンと出来て居ました。

靴屋は又驚いて、それを店へ出して置くと、其の日は二人の客が来て、矢張り良い靴だと褒めて、普通はづれて高い代價を拂つて、それを買つて行きましたので、又それをもつて、四足分の革を買つて、晩方前日のやうにして置きますと、其の翌朝は、チャンと四足の靴が出来て居ましたので、靴屋はそれを賣つて八足分の革を買ふだけの金銭を得ました。

正直靴屋

それから毎日、こんな工合で、漸々多くの靴が出来ましたから、店は次第に繁昌して、一廉の金持になり、楽しい日を送ることが出来るやうになりました。

或る晩、妻と二人で、色々の話しをした後、靴屋は妻に向つて、『ねえお前、眠つてる内に、立派な靴が出来るといふは、實に不思議な話だ、誰が、こんなに親切にして靴をこしらへて呉れるんだか、今夜は二人とも眠ずにおて見届けようじやないか』

と云ひますと、妻も賛成して、其の晩は、燈火を點したまゝで夫婦は座敷の隅つこの所に掛けてある幕の後に隠れて、聲も立てずにチツと様子をかいつて居ました。

正直靴屋

其の内に、夜もだん／＼更けて四邊も静かになり、何所かのお寺で撞く十二時の鐘が、ポーン／＼とかすかにきこえる時分、何所からどうして来たのだから、丸裸の一寸法師が二人出て来て、仕事臺の前の椅子に腰を掛け、前晚靴屋が裁つておいた革を取り上げて、小さなかはゆらしい手で、それを曲げたり折るかへしたり、縫つたり叩いたりする技の、手早くて美事な事は、どんな上手な靴屋でも、これには及ばぬ程でありました。

間もなく、何足かの靴が立派に出来上つて、チャンと、仕事臺の上並べられたのは、夜明より餘程前でありましたが、二人の一寸法師は、忽ちパツと姿を消してしまひました。

翌朝、靴屋の妻は、夫に向つて、

『ねえあなた、昨晚のあの小さいお方は、どうしてこんなにお金持にして下さつたんでせう、それにしても、何時までも、夫歸がいゝ氣になつて、お助けに預つてるのも、餘りづるい話ですから、恩返しに何とかして上げなければすみませんが、お二人とも、丸の裸ですから、私は、お禮のしるしに、着物をこしらへて上げたいと思ふんですから、あなたは、小さい靴を一足づゝ作つて上げて下さいまし』

と云ひますと、夫も、それはいい思ひ付きだといつて賛成し、其の日は、夫婦で精出して、靴や着物をこしらへ、晩になると、何時

正直靴屋

正直靴屋

も革かわをのせておくかはりに、着物きものや靴くつを、仕事しごと臺だいの上に載のせて置おいて、前まへ晩ばんのやうに、幕まくのかけから、そつと見みてゐました。

すると、其そのの夜よも更ふけて、昨あ夜よと同じ時とき分ぶんになりますと、二人ふたりの一寸いっすん法師ほうしは、何どこ所こからとも知しれず、チヨロ／＼とあらはれて、仕事しごと臺だいの所ところへ行いきますと、何いつ時つものやうに革かわはなくて、其そのの代かりに、小ちひさい着き物ものや靴くつがありましたから、大たいさう喜よろこんで、互たがひに顔かほ見み合あせて、にこ／＼笑わらひ、着き物ものを着き、靴くつをはいて、飛とんだりはねたりしながらパツと又また何どこ所こかへ隠かくれてしまひました。

其そのの翌あくる晩ばんからは、もう一寸いっすん法師ほうしの姿すがたは見みえませんでした、靴くつ屋やは商しょう賣ばい大たい切せつと、一いっ生しょう懸けん命めいかせぎましたから、店みせは益ますく々はん繁じやう昌して、大たい

さうな金持かねもちになりました。めでたしく。

打出の小槌

昔むかし、アメリカの田舎ひなに、一人ひとりの少年せうねんがありました。早はやく父ちち母ははに別わかれたので、網あみをもつて魚さかなを捕とるのを業げふとして、やうやく、生計くらしを立たてゝゐました。

或あるる時とき、いつものやうに、網あみをかついで、自じ分ぶんの村むらから、二に三さん里りはなれた或あるる川かへ行いつて、網あみを打うちますと、一は羽つばの鴻この鳥とりが掛かりました。

少年せうねんは、自じ分ぶんは、職しやう業がいのために魚さかなを捕とるけれども、鳥とりを捕とるのは

打出の小槌

打出の小槌

かはゆさうだと思つて、放してやりますと、鴻の鳥は、大さう喜んで、

『あなたは實に情け深いお方です、斯うして、あなたの網に掛つたものを助けて下すつたから、御返禮にいゝ事を教へて上げませうこゝから一里ばかり川上へ行きますと、大きな岩の傍に、柳の木が二三本生えてゐる淵がありました、其所に、金の魚と銀の魚とがゐますから、それを捕へて、王様に差し上げなさい、すると、王様はきつと喜んで、お前の望みのものをやると仰しやいますから、さうしたら、私をお姫様のお婿様にして戴きたいと云つてお頼みなさいまし』

と教へて呉れました。

少年は大さう喜んで、鴻の鳥と別れ、一里ばかりも川上へ行きますと、鴻の鳥の教へた通りの淵があつて、金の魚と銀の魚とが、鱗を輝かして遊いでゐます。

少年は呼吸をはかつて、ザンブと網を投げますと、金銀二疋の魚は、一度に掛りましたので、喜び勇んで網を引上げ、それをもつて國王のお城へ行き、王様に差し上げますと、王様は大さうなお喜びで、何でも望みの物をやると仰せられました。

少年は、しめたと思つて、

『それでは、どうか、私をお姫様のお婿様にして下さいまし』

打出の小槌

打出の小槌

と申しました。

王様は、これには、少しお困りになつた様子で、

『お前の望みを聴かないのではないが、私もお前に一つの注文がある、それは外でもないが、世界にたつた一つの打出の小槌といふ寶物がある、それをお前が持つて来て呉れたら、其の時こそ、喜んで、お前を姫の婿にして、私の跡を継がせよう、まづそれまでは、これで我慢して呉れよ』

と云つて、澤山のお金を下さいました。

少年は、其の金を戴いて、お城を出しましたが、世界にたつた一つの打出の小槌といふ寶物は、何所に在るのやら、どうして、それを

探していゝのやら分りませんから、悄悄として、先刻の川のほとりへ來ますと、鴻の鳥が待つてゐて、どうでしたと尋ねましたから、少年は、王様の云はれた通りを話しました。

すると、鴻の鳥は、

『それは困りましたねえ、兎も角も、鳥の王様の所へ行つて、う

かいつてみませう』

と云つて、少年をそこに残して置いて、自分ひとり、鳥の王様の所へ飛んで行きました。

鳥の王様は、其の時、廣いお庭の中を散歩してお居でゝしたが、

鴻の鳥から、右のわけを申し上げますと、

打出の小槌

『私も、何所に在るか知らないから、家來を集めて尋ねてみよう』
と云つて、首に掛けて居られた笛をとつて、ピーと一聲高くお吹
きなされると、忽ちの間に、世界中の鳥か皆集りました。

そこで、鳥の王は、一同に向つて、

『お前等の中で、打出の小槌の在る所を知つてゐる者はないか』
と尋ねられました。すると、一羽の大きな鶯が進み出て、

『王様、打出の小槌は、黒鐵山の鐵魔將軍のお城の中に御座いま
すが、これは、なかく取る事は六ヶしう御座いませう』
と申しました。

『けれども、是非とも、それを取つて來なければならぬ者があ

るのだから、お前御苦勞だけれど、其所へ案内してやつてお呉れ』
と云ひ付けて、外の鳥はかへされました。

そこで、鴻の鳥は、鶯を連立つて、先の川のほとりへ來ますと、
少年は、どうかうかとうかと心配して、待つてゐました。

此の時、鶯は少年に向つて

『打出の小槌は、黒鐵山の鐵魔將軍のお城に在りますから、これ
を取るといふは、容易な事ではありませんが、兎に角、私が案内し
ますから、私の背中へお乗りなさい、そして、眼を閉いでお居でな
さい、さうしないと、餘り早いから、目まひがして落つこちます』
と云ひましたので、少年は、鶯の背中へ乗つて、目を閉ぎますと

打出の小槌

打出の小槌

鷲は、羽叩きの音凄まじく、空へ舞ひ上り、矢を射る如くに、飛んで行きました。

五六時間たつて、鷲は地へ下りましたので、少年は、眼を開いて見ると、眞黒な山の中腹で、日も夕方に近い時分でありました。

『さあ、お下りなさい、こゝが黒鐵山ですよ』

と鷲が云ひましたので、少年は鷲の背中から下りますと、鷲は少年に向つて、

『こゝから鐵魔將軍のお城までは、まだ山道一里程ありますが、一條道ですから、迷ふやうな事はありませんから、急いで行つて、うまく小槌を取つておいでなさい』

と云つて、翼の下から、白い羽を一本抜いて少年に渡し、

『これを上げて置きますから、歸りには、これを空へお投げなされると、私が又迎ひに來ます』

と云つて、鷲は又飛び去りました。

少年は鷲に別れて、坂道を急いで行きますと、道傍に一本の林檎の木があつて、餘り澤山實がなつて居るので、枝が折れさうになつてゐます。少年はこれを見て、枝が折れてはかはいさうだと思つて木の棒を拾つて、二つ三つ枝を叩きますと、林檎の實が、ばらばらと落ちて、枝は軽さうになりました。

林檎の木は、大さう喜んで、少年に向ひ、

打出の小槌

打出の小槌

「あなたは情け深いお方です、私の枝が折れるのをお助け下さつたから、御返禮にいゝ事を教へませう、私の根の東側の所を掘ると小さい金の玉が出ますから、これを持っておいでなさい、これは力の玉といつて、これさへあれば、どんな堅い物でも破ることが出来ます」

と云つて教へましたから、少年は、其の根元の東側を掘りますと果して、小さい金の玉が出ましたので、大喜びで、それをもつて上つて行きました。

少し行くと、小さい谷川が、道を横切つて流れてゐましたが、川の真中に、大きな岩があつて、水がそれに堰れて、うまく流れるこ

とが出来ません。

少年はこれを見て、かはゆさうに思ひ、かゝ力の玉をもつてゐますから、其の大きな岩をわきへ押し除けて、水の流れられるやうにしてやりますと、水は喜んで、

「あなたは情け深いお方です、私は岩にせがれて困つてゐたのをお助け下さつたから、御返禮にいゝ事を教へませう、あなたが今押し除けて下さつた岩のあつた所に、まん圓い赤い小石がありますから、それを持つておいでなさい、これは水石といつて、これさへ持つてゐれば、どんな燃えたつ火の中へ入つても少しも火傷をするやうな事はありません」

打出の小槌

打出の小磁

と教へて呉れましたので、少年は、岩のあつた跡を探すと、まん
圓い赤い小石がありましたから、大喜びで、それを持つて、又山を
上りました。

やがて、山の頂上の、鐵魔將軍のお城へ着きました。

見れば、實に嚴重な構へで、日も全く暮れてしまつてゐるので、
大きな鐵の門は、扉が閉つてゐます。

少年は、拳で、扉を二つ三つ叩いて、

『お頼み申します、お頼み申します』

と云ひましたけれども、開けて呉れさうにもありませんので、力
の玉の効能は此の時だと思つて、兩手を扉にあて、ウーンと押し

ますと、さすがに堅い鐵の扉も、バリ／＼と烈しい音がして破れま
したので、少年は、易々と中へ入りました。

少年は立關へ行つて、

『お頼み申します』

と云ひますと、奇妙な風をした眞黒な男が出て來ましたから、鐵
魔將軍にお目に掛りたいと云ひました。

眞黒な男は、そこに少年を待たせて置いて、奥へ行きましたが、
直に出て來て、

『サア此方へ』

と案内しました。

打出の小磁

打出の小槌

少年は案内に従つて、廣い座敷を幾間も幾間も通り、一番奥へ入りました。

此所は凡千疊敷程の廣間で、正面の一段高い所に、立派な机に向つて、椅子に掛つてゐるのは大將の鐵魔將軍で、顔の色は、石炭のやうに黒く、鐵の針金のやうな髭は胸までも垂れ、眼は、二つの外額の眞中に一個あつて、何れとギラ／＼と輝き實に恐ろしい姿であります。

將軍の兩側には、眞黒な顔の家來が百人ばかり並んで居ります。少年は此所へ入つて、將軍に向ひ、叮嚀に禮をしますと、將軍は虎の吼えるやうな聲で、

「其方は、アメリカから、此の遠い黒鐵山まで參つたのは何の用だ」

と尋ねました。

少年は、少しも恐れる様子もなく、

「ハイ、實は、此のお城に、打出の小槌といふ寶物のあるといふ事を承りました、それを戴きに參りました」

と云ひますと、將軍は、ハ、ハ、ハ、と大笑ひをして、

「其方は小忰の分際で生意氣な事を云ふ、打出の小槌は、此の黒鐵山ばかりでなく、實に世界に二つとない寶物だから、中々やる事は出來ない、併し、其方が、予の家來と相撲をとつて、勝つたら、

打出の小槌

打出の小槌

やつてもよろしい』

と云ひましたので、少年は、

『それは面白い御座いませう、それでは、どうか相手を出して下

さい』

と云ひました。

そこで、鐵魔將軍は、家來の者に云ひつけて、少年と相撲を取ら

せましたが、少年は、力の玉を持つてゐますから、何程強い者でも

敵ふわけがありません、將軍の家來百人、代るく相手になりまし

たが、皆ドン／＼投げ付けられてしまひました。

初めは馬鹿にしてゐた將軍も、少年の強いのに驚いて、

打出の小槌

『お前は中々強い、それでは約束通り、打出の小槌をやるが、今は土藏の中にとりしまつてあるから、明日の朝出してやらう』

と云つて、少年に御飯を喰べさせ、家來に云ひつけて、少年を裏の牛小屋へ入れさせ、外から錠を下させました。

其の小屋には、頭から尻までの長さ二間もある大きな牛がゐて、しかも、其の牛は、口から火を吹くといふ恐ろしい獣であります。

牛は、少年が入つて來たのを見て、さかんに火を吹きかけました

が、少年は、水石を持つてゐますから、少しも火傷をせず、兩手で牛の角を持つて、一つねぢりますと、さすがの牛も、ごろりと横に倒れましたので、少年は牛を枕にして、其のまゝ眠つてしまひまし

打出の小槌

た。

翌朝になつて、鐵魔將軍は、かのアメリカの少年は、昨晚牛に焼き殺されたであらうと思つて、家來に牛小屋を開かせますと、少年は、牛を枕にして寝てゐましたが、戸の開く音に眼を覺して、家來を見たので、家來は驚いて、此のわけを將軍に話しますと、將軍も大さう驚いて、これは、きつと魔法使ひに違ひない、若しやらないと云へば、自分の命まで取られるかも知れないからと思つて、大切な打出の小槌を、家來に云ひつけて、土藏から取出させ、少年を呼び出してやりました。

少年は小槌を受取り、天にも昇る程の喜びで、鐵魔將軍のお城を

出ました。

將軍は、一旦やつたはやつたものゝ、世界に二つとない寶物でありますから、どうしても惜しくて堪らず、追附いて取戻さうと思ひ身支度して、二十五貫目もある鐵棒を持ち、十人ばかりの家來を連れて、少年の後を追駈けました。

少年は、かの谷川のほとりまで來まると、後の方が騒がしいからふりかへつて見ると、鐵魔將軍が追駈けて來たので、心の中に笑ひながら、川を飛び越しました。

そこへ將軍が追附いて、川を飛び越さうとしますと、川は急に廣くなつたので、將軍始め家來の者等、皆川へザンブとはまりました。

打出の小槌

打出の小槌

皆々大いに焦つて、早く川を越さうとすれば、川幅は益々廣くなり、水も段々深くなつたので、將軍や家來の者等は、あはれにも、遂に溺れて死にました。

やかて、少年は、昨日鷺に別れた所へ来て、昨日貰つた羽を空へ投げますと、間もなく、鷺が迎へに來ましたので、それに乗つて、アメリカへ歸り、國王に、打出の小槌を差上げますと、王は大さう喜んで、約束通りお姫様のお婿様にして下され、自分の後繼と定められました。めでたしく。



朝 寢 坊

或る所に朝寢坊の子供がりました。毎朝庭の朝顔の花を見るつもりで起きますけれども、餘りおそいので、花は何時もしぼんでゐました。

子供は、大さう残念に思つて、『今夜は寢ずにて見よう』と、其の一日晝寢して、夜は少しも眠らずに番をしてゐました。

其の内に、東の空が白くなり、夜も明けかゝつたので、朝顔がそろ／＼咲き出ようとすると、傍に朝寢坊さんがゐましたから、驚いて俄かにしぼんでしまひました。

朝 寢 坊

狸のお禮

子供は不思議に思つて、

『オイ／＼何故そんなに早くしぼむの』

と尋ねますと、朝顔は、

『あなたが起きてるから、もうおひる時分かと思つたからです』
と答へました。

狸のお禮

世界お伽噺といふ以上は、勿論日本の事柄も加へなければなりませんから、こゝには、少し趣をかへて、「狸のお禮」といふお話をしませう。

或る時、東京の山の手の、あるお寺の藪の蔭の小路で、近所の子供等が、一疋の狸を捕へました。

『こりや何だらう』
『犬だらうか』
『犬じゃない、猫だらう』
など、大勢が騒ぎ立てますと、太郎といふ少年が、

『こりや狸だ、何時か上野の動物園で見たのと同じだ』
と云ひましたので、大勢は、

『何だ、狸だ、狸なら殺してしまはう』

と、石を持つて来るやら、棒切を持つて来るやらして、すんでの事に狸の命を取らうとした所へ通りかゝつたのは、大工の彌吉といふ人です。

狸のお禮

狸のお禮

彌吉は、今日お父さんの命日で、此のお寺へ、お墓詣りに来た歸りがけでありますから、此の狸を助けてやりたいと思つて、

『まあお待ち、そんなかはいさうなことをするものじゃない、お前さん等も、折角捕へたんだから、其の狸を私に賣つてお呉れ、ね、皆にお錢を上げるから』

と云ひました。太郎は、

『小父さんがお錢を呉れるんなら、賣つてやらうじやないか』

と云ひますと、松吉も竹次郎も、

『それがいゝゝゝ、小父さんに賣つてやらう』

と云つたので、外の者も皆賛成しました。

そこで、彌吉は、各々に何程づのお錢をやると、子供等は喜んで、何所かへ行つてしまひました。後で、彌吉は狸に向つて、
『お前飛んだ目にあつたな、もうこれからは、子供に見付らないやうにしくちやいけないよ』
と云ひきかせて、其のまゝ家へ歸り、御飯をたべて、寝てしまひました。

やがて、夜も更けて、二時頃になりますと、彌吉の家の表の戸を
トン／＼叩いて、

『御免下さい、御免下さい』

といふものがありますから、彌吉は目をさまして、

狸のお禮

『誰だ、今時分表をたたくのは』

と尋ねますと、外の者は、

『今日晝間助けていた狸です』

と云ひましたから、彌吉はびつくりして、

『ナニ、狸だつて、じやうだんじやない、折角俺が助けてやつた

ものを、誑かしに来るといふはひどいじやないか』

と云ひました。狸は、

『どう致しまして、誑すどころじやない、お禮に来たのです』

『お禮なんぞ来なくつてもいゝから、早く歸んな』

『イエ、それが何です、あの、晝間あなたに助けて戴いて、穴へ

歸つて、お母さんに其の話をしましたら、お母さんも大さう喜んで

そりやお前の命の親だから、早くいつて、御禮をして来いと云ひま

したから、参りましたのです』

と云ひますと、彌吉は、なほ氣味悪く思つて、

『それだけで澤山だから、もう歸つてお呉れ』

と云ひましたが、狸は中々聽かないで、

『そんな事を云はないで、早く戸を開けて下さい、開けて下さら

なけりや、節穴から飛び込みますよ』

『困つた事を云ふ奴だな』

と、彌吉がぐづくしてゐる内に、狸はもう、彌吉の枕頭へ來ま

狸のお禮

狸のお禮

した。彌吉は、驚きまして、

『いゝから、早く歸つて呉れ』

と云ひました、けれども狸は、ちやんと坐り込んで、晝間助けて

貰つたお禮の言葉を述べた後、

『折角來たのですから、何か御返禮をませう、あなたがお金に

なつて呉れと云へばお金にもなりますし、着物になつて呉れと云へ

ば着物になりますよ』

と云ひましたから、彌吉は、

『それは誠に重寶だが、俺の家は此の通り狭いから、お前の寝る

所がないよ』

『いゝえ、いくら狭くつても、大丈夫です、縮まつて寝ますから』

と云つて、狸は彌吉の枕頭の所に、丸く縮まつて寝てしまひまし

た。

やがて、夜が明けますと、狸は先へ起きて、御飯をたいたり、お

湯をわかしたり、表の掃除をしたりして、彌吉の傍へ行き、

『親方々々』

『うるさいな、誰だ』

『私です、狸ですよ、もう夜が明けましたから、お起きなさい』

『馬鹿に早いな』

『御飯もお汁も出來てゐますから、早くお起きなさい』

狸のお禮

狸のお禮

「嘘ばかり云つてらあ、家にやお米も薪もなくなつてしまつてたんだ」

「お米も薪も、ちやんと、私が買つて來たんです」

「だつて、お錢がありやしないじゃないか」

「そこが狸ですから重寶です、木の葉を持つて行つて、紙幣に見せて買つて來たんですから、今時分、向ふの店では、紙幣が木の葉になつてるでせう」

「驚いたな、併しそれは何しろ重寶だ」

と云つて、彌吉はやうやく臥床をはなれ、

「成程、すつかり支度が出来たな、こりや有難い、俺のやうな獨

身者には結構だ、だが、お前、狸の形でちや都合が悪いから、何でもいゝから人間の形になつて呉れ」

「え、何にでもなりませう、何がよう御座んす、十七八の娘になりませうか」

「そりや面白い、早速化けて呉れ」

「それでは、あなたが、ボン／＼／＼と、三つ手拍子を打つて下さい、其の途端に化けますから」

「ヨシ／＼、そら打つぞ、いゝか」

と、彌吉が、ボン／＼／＼と三つ手拍子を打つと、美しい娘に化けました。

狸のお禮

すると、近所隣や、友達は、彌吉が、何時の間にか、いゝお嫁さんを買つたと云つて、大騒ぎをして、うるさう御座いましたから、今度は、十四五の小僧に化けさせました。

其の時、彌吉は、ふと思ひ出して、

『時に狸公、今化けさせたばかりで氣の毒だが、俺は蕎麥屋に、十錢借りがあるから、今に取りに来るだらうから、早速化けて呉れ』
『そんな事はわけもない事です、それじゃあ、手拍子をお頼み申します』

『よし来た、そら、いゝか』

と云つて、ボン／＼／＼と三つ叩くと、忽ち、十錢の銀貨に化け

ました。

所へ、表から、『今日は』と云つて、蕎麥屋の出前持が入つて来て、『僅ばかりに度々参りまして、お氣の毒様ですが、どうか、今日は頂戴したいもので』

『あゝ、さうかい、實は、もう来るだらうと思つて、十錢のお錢をこしらへて待つてゐたんだ』

と云つて、お錢を渡しました。

『へイ有難うございます』

と、蕎麥屋は、お錢を受取り、臺の上へ乗せて外へ出ました。後で彌吉は、

狸のお禮

狸のお禮

『狸公のおかげで巧くいつた、狸公め、銀貨に化けて、臺の上へ乗かつて行つたが、今にお錢がなくなつてしまつて、蕎麥屋の出前持は驚くだらう』

と云つてる所へ、狸は歸つてきました。

『オヤ、もう歸つてきたのか、お前向ふまで行つたかい』

『いゝえ、途中から逃げ出して來たんで、私が、出前持の肩の上の臺の上から、飛下りる拍子に、臺をひつくりかへしたから、井も何も往來へ落つこちて、メチャクに毀れてしまひましたから、出前持の奴さん、膽を潰して、ドン／＼逃げ出してしまひましたよ』

『そりや、餘り亂暴だな。そりやいゝが、狸公、今度は一圓紙幣

に化けて呉れ』

『よう御座んす、化けますから、手を叩いて下さい』

『よし來た、そら』

と、又、彌吉が、ボン／＼を三つやりますと、狸は、新しい一圓紙幣に化けました。

『オットよし／＼、上等々々』

と云ひながら、二つに折らうとすると、

『親方、折られちや苦しい』

『成程、こりやもつともだ』

と云つてると、表から、『今日は』と、入つて來たのは、呉服屋で、

狸のお禮

『どうも、度々上つて相済みませんが、御勘定を戴きたいもので』

『何程だつたつけね』

『へい、まだ一圓残つてゐます』

『さうか、丁度一圓こしらへて待つてゐたんだ、サア渡すから、よく改めてもつて行きな、いゝかい、餘りぐるぐると廻すと、紙幣が眼を廻すよ』

『エ、何ですつて』

『イヤじやうだんだ、いゝかい、確に渡したよ、二度とはやらな
いよ』

『へい、確かに、二度と戴かうとは申しません』

と、呉服屋は、一圓紙幣を四ツ折にして、財布へ入れて、出て行きました。

間もなく狸が歸つて来て、

『親方、どうも、飛んだ目にあひました、あの呉服屋の奴は、私を四ツ折にして財布へ入れたんで、苦しいの苦しくないのつて、死んでしまふのかと思ふ位でしたから、財布の底を喰ひ破つて飛出して來ました』

『餘り亂暴だけれど、まあ仕方がない。さうく、狸公、御苦勞だが、もう一度化けて呉れないか』

『そりや、いくらでも化けますけれど、もう、銀貨や紙幣になる

狸のお禮

事は御免蒙りたいですね』

『いや、今度は、もつと面白いものだ』

『じゃあ、何に化けるんです』

『鯉になるんだ』

『魚になるのは、あぶないから厭です』

『ナニニ大丈夫だ、實は、俺の親方の家にお産があつたんだけれ

ど、俺はまだお祝ひにも行かないんだが、鯉は乳の出る薬ださうだ

から、一つお祝ひに持つて行かとう思ふんだから、是非化けて呉れ』

『さうですか、それじゃあ、化けませう、又例の通り、手拍子を

打つて下さい』

『そら打つぞ』

と云つて、ボン／＼／＼とやりますと、三尺ばかりの真鯉になりました。

『それじゃあ、ちつと大き過ぎるな、も少し小さく』

と云ひますと、鯉は漸々小さくなつて、見えなくなつてしまひました。

『オイ／＼、狸公何所へ行つたんだ』

『此所に居ります、此所に』

『此所つてもわからない、何所だ／＼』

『墨の目の中です』

狸のお禮

狸のお禮

『じやうだんじやない、疊の目へ入るやうな小さな鯉じや、しやうがない、もつと大きくなつて呉れ』
と云ひますと、又漸々大きくなつて、一尺五寸ばかりになりました。

『オット、それでよし〜』

と、彌吉は狸の鯉を、岡持の中へ入れて、水を入れますと、狸は苦しがつて、

『こりや堪らない、水は御免です』

『ナニ、少つとの間の忍耐だ』

と、彌吉は、岡持を下げて、親方の家へ行き、

『親方、どうも御無沙汰をしました、此間は又、お内儀さんが、お産をなすつたさうで、お目出度うございます、こりや、粗末な物ですが、お祝ひのしるしです』

と云つて、岡持を差出すと、親方は、大さう喜んで、

『こりや好い物を呉れた、今日はゆつくり遊んで行くがい〜』

と云つてる所へ、出入の魚屋へ来ましたので、親方は、

『オイ魚屋さん、いゝ所へ来た、今他所から貰つたんだが、此の鯉を、鯉こくにこしらへて呉れないか』

『オヤ〜親方、そいつは餘り氣が早いですねえ、さやうなら』

と、彌吉は、家へ歸つてしまひました。

狸のお禮

狸のお禮

「何方どろちが氣きが早いはやんだか、彌吉ヤキチもをかした男をとこだ。オイ魚屋さかなやさん、早速はやくこしらへて呉くんな」

「え、ようござんす、早速はやくこしらへませう、魚さかなの中うちでも、鯉こいは偉えらいもので、俎板なないたの上うへへ乗のせれば、ちやんと、覺悟かくごをきめて、跳ねはなないから偉えらいもんです」

と云つて、鯉こいを俎板なないたの上うへへ乗のせ庖丁はうちやうでなでますと、正躰しやうたいは狸たぬきですから堪たりません、魚屋さかなやの手てを、バリ／＼引搔ひつかいて、ピチ／＼と跳ねは引窓ひきまどから逃にげ出たさうとしましたから、魚屋さかなやをはじめ、家内かないの者ものはびつくりして、

『やあ大變たいへん々々、鯉こいの天上てんじやう／＼』

と騒さわいでる内うちに、狸たぬきは逃にげ出だして、彌吉ヤキチの家うちへ歸かへつて來きて、

「親方おやかた、驚おどろきましたよ、向むかうも驚おどろいたが、此方こつちも驚おどろきました、俎な板いたの上うへへ乗のせられて、庖丁はうちやうで身躰みなを撫なでられた時ときの心持こころもちたら、ありませんでしたよ。私わたしや、もう堪たらなくなつたから、魚屋さかなやの手てを引搔ひつかいて、引窓ひきまどから逃にげて來きました」

「こりや驚おどろいたな、流ながしへでも跳はね出だして逃にげて來きればよかつたに。時ときに、狸公たぬこう、今日けふは淺草あさくさへ活動寫真かつどうしゃしんでも見みにつれて行いかうと思おもふがどうだ」

『そりや結構けつこうです、是非ぜひどうぞ、つれて行いつて下ください』

『じゃあ、つれて行いくが、實じつはお錢あしがないんだ。所ところで、何時いつか、

狸のお禮

あのそら、お前を助けたお寺の和尚から、茶釜を持って来て呉れろつて、頼まれてゐるんたから、茶釜さへ持つて行けば、五圓位にはなるんだが、どうだ狸公、うまく茶釜にならないか』

『ようござんす、なりませう』

『だが、今度は、少し忍耐してゐて、そつと逃げ出さなくちやいけないよ。そら、いゝか、手を拍くよ』

と、ボン／＼を三度やりますと、狸は、誠に形状の好い茶釜に化けました。

彌吉は喜んで、其の釜を風呂敷に包み、お寺へ持つて行つて、『御免下さいまし』

といふと、小辨といふ小僧が出て來ました。

『ヤア小辨さん、今日は』

『ア、彌吉さんですか、何か御用で』

『エ、先達て和尚さんがお頼みになつたお釜を持つて参りましたから、和尚様にさう云つて下さい』

『さうですか、少々お待ちなさい』

と云つて、小辨が奥へ行つて、和尚に此の話をしますと、こちらへ通せと云ひましたから、小辨は出て來て、彌吉を和尚の居間へ案内しました。

彌吉は叮嚀に挨拶して、

狸のお禮

狸のお禮

『和尚様、此頃、或る所で、面白い釜を見附け出しましたから、これなら、きつとお氣に入るでせうと思つて持つて参りました。』
と云つて、風呂敷を解き、釜を和尚の前へ差出しました。

和尚は釜を手に取つて、

『成程、こりや好い釜だ』

と云ひながら、グル／＼廻しますから、彌吉はこれを見て、

『和尚様、餘り廻すと、釜が眼を廻しますから……』

『ナニ、釜が眼を廻す、そりや一躰どういふわけだね』

『イエナニ、じやうだんで』

『釜は面白い好い釜だが、水を入れて、火に掛けて見なけりや、

瑕が有るかないか、わからなから』

『そ、そりや大丈夫、瑕なんぞありやしません、私が保証します』

『さうかい、それで代價は』

『何程なら好いでせう』

『そんな事を云はなないで、お前の方から云ひ出して御覽』

『さうですね、五、……五、……五圓位ではどんなものでせう』

『さうさね、瑕さへなければ、五圓は高くないね。それで三圓丈

今日上げるが、あと二圓は、二三日の中に上げることにしやう、ま

ア、何しろ、水を入れて火に掛けてみよう、小辨、爐に火をおこし

なさい』

狸のお禮

彌吉は、あはて、

『和尚様、そんな事をしちや大變です』

『ナニ大變なものか、お釜は湯を沸すものだもの、水を入れて火に掛けるのは當り前じやないか』

『だつて、釜が火傷するといけませんから』

『馬鹿な事を云ひなさんな、釜は生き物じやないよ、鐵でこしらへたものだよ、小辨早く火をおこして、釜を掛けなさい』

と云ふと、小辨は、爐に炭をつぎ、釜に水を入れますから、彌吉は、もう堪らなくなつて、三圓のお金も貰はないで、

『どうも、お喧しうございました、さやうなら』

と云つて、サツサと歸つてしまひました。

『おいしな男だなあ、金も受取らないで、何だか、逃げるやうにして歸つてしまつた』

と云つてる内に、小辨は、お釜に水を入れて、爐の上に掛け、圍扇でもつて、バタ／＼煽ぎ立てますから、狸、熱くて堪らないけれども、彌吉に云ひ付けられて居ますから、ヂツと忍耐してゐますと和尚は、

『コレ、小辨、もつとドン／＼煽げ』

と云ひましたので、小僧の小辨、ありたけの力を出して煽ぎますから、火は漸々おこつて来て、愈々熱くて堪らないので、狸は、

狸のお禮

狸のお禮

『小辨、お尻があつい』

と云ひました。小辨はびつくりして、

『和尚様々々々、お釜が口をきゝますよ』

『馬鹿な事があるものか、もつとドンく煽げ』

『此の通り、一生懸命で煽いで居ます』

『コレく小辨お尻があついよ』

『こりや不思議だ、あれが和尚様にきこえませんか』

和尚は少し耳が遠いから、よくわかりませんので、

『そんな事があるものか、自分に團扇をよこせ、一つ煽いでみる

から』

と、和尚が團扇を取つて煽ぎますと、

『和尚、お尻があつい、和尚、お尻があついよ』

と、少し大聲で云ひましたので、和尚も聞きつけて、

『成程、口をきくな、こりやおかしいぞ、小辨、お前も煽げ』

と、二人で煽ぎましたから、狸はもう忍耐がしきれなくなり、正

躰をあらはして、ヒョイと飛上りますと、水がザーとこぼれて、こ

ら一面灰神樂。二人はびつくりぎやうてんしてる内に、狸はドン

く逃げてしまひました。あとで、和尚は小僧に向つて、

『小辨、今のは狸だつたな』

と云ひますと、小僧はぬからず、

狸のお禮

三人 醫 者

『そりや其の筈です、あのお釜は お腹が太鼓のやうにふくらんでゐましたもの』
と云ひました。

三人 醫 者

今は昔、獨乙の或る所に、三人の醫者がありまして、三人とも、學問も博く、技術も優れて居ました。
或る時、三人連れ立つて旅をして、やがて、太陽も西に沈み、鳥も埒に歸る頃、一つの小さい町へ着いて、一軒の宿屋に泊りました。
其の晩、三人は、宿屋の主人に向つて、自分等の學問や技術の優

れてゐることを自慢した後、一人が、

『どんな難かしい病氣でも、どんな重い負傷でも、私等の手に掛けたら、治らないといふ事はない、若し、此の家に病人か負傷人でもあれば、無料で、直に治して上げよう』

と云ひました。
主人は、感心して、三人の話をきいてゐましたが、やがて、三人に向つて、

『ハイ有難う御座いますが、只今は病人も負傷人も御座いませぬけれど、何か、先生等の優れて居らつしやる所を、見せて戴くわけにはまゐりませぬまいか』

三人 醫 者

三人 醫者

と云ひました。

すると、眼鏡といふ一人が、

『としく面白い事を見せて上げるから、大きなお皿を一枚持つておいで』

と云ひましたので、主人は、其の通りにしました。

そこで、眼鏡は他の二人に向つて、

『僕は、腕を切つて見せるから、君等も、何かして見せてやりた

まへ』

と云ひますと、鼻尾は、

『よし、僕は、臍腑を取り出して見せよう』

と云ひました。

『それでは、僕は、眼の玉を抉り出して見せよう』

と赤目は云つて、革靴の中から、小さい壘へ入つた二色の薬と、

繙帯三巻と、小さい針と細い糸と、ドキドキ光る小刀とを取り出し

ました。

すると、眼鏡は、

『先づ、僕から始めようかね』

と云ひながら、左の腕をまくり上げ、肘の所に、一色の薬をぬり

小刀を取つて、物の美事に、肘から先を切り落とし、切つた腕をお皿

の上に載せ、両方の切口に、他の一色の薬を塗つて、手早く、残つ

三人 醫者

三人 醫者

腕の切口に繃帯を巻き付けました。
 次に鼻尾は、まづ衣服を脱いで裸躰になり、一色の薬を腹に塗つて、小刀を持つて、腹を縦に六七寸切り開き、臟腑を擱み出して、お皿の上に載せ、傷口と臟腑とに、他の薬を塗り、糸と針とを取つて、手早く傷口を縫ひ合せ、そこに繃帯を巻き付けました。
 今度は赤目の番になりました。赤目は、一色の薬を兩方の眼の周圍に塗り、小刀の先で、兩方の眼玉を抉り抜いて、お皿の上に置き、他の薬を、傷口と眼玉とに塗つて、グル〜と繃帯を巻きました。
 此の時、眼鏡は主人に向つて、
 『どうだい、御主人、面白かつたかい』

と尋ねますと、主人は、
 『いやもう、實に感心してしまひました、餘りの事で、私は此の通り身躰が慄へます』
 と云ひながら、ブル〜と慄へてゐました。
 『ハ、ハ、ハ、素人は仕様のないものだなあ』
 と云ひながら、鼻尾は主人に向つて、
 『明日の朝は、元の通りにして見せるから、此のお皿の物は、大切にしまつて置いてお呉れ』
 と云ひました。
 『ハイ、かしてまりました』

三人 醫者

ヨ 人 醫 者

と云つて、主人はお皿をもつて厨房へ行き、戸棚の中へしまつて置きました』

やがて、夜も大分更けたので、三人の醫者も臥床へ入り、主人も眠りました。真夜中になると、厨房の方で、何かガタ／＼音がしたので、主人はふと眼を覺して、厨房へ行つて見ると、これは大變に載せてあつた腕と臟腑と眼玉を喰べてしまつたので、

主人は驚いて、どうしたらよからうかと、しばらくは途方に晦れて居ましたが、やがて、思ひ出した事があるので、

『さうだ、臟腑と眼玉とは、間にあふが、どうも腕に困つた』

な、何か好い考案はないものか知ら』

と、臥床の中で、しきりに考へてゐますと、間もなく、裏口をやぶつて、一人の盜賊が入りましたから、これこそ誠に天の助けと、主人は大いに喜んで、直に其の盜賊を捕へ、麻繩で縛つて置いて、庖丁で、左の腕を切り落とし、お皿の上へ載せて、戸棚の戸を閉め、

『あ、これでよかつた、盜賊様々だ』

と云つて、眠つてしまひました。

翌朝、主人は、料理に使つた魚の眼玉と、鳥の臟腑とを取つて、お皿に載せ、何くはぬ顔をして、三人の醫者の所へ持つて行きますと、三人は、物が易つてゐるとは知りませんから、それを受取り、

三 人 醫 者

三人 醫者

眼鏡さんは腕を継ぎ合せ、鼻尾は腹へ臓腑を納め、赤目は眼玉を入れて、

『どうだい、御主人、これで元の通りになつたらう』

と云ひましたので、主人は又も感心して、

『どうも實に恐れ入りました、先生等は、誠に御名人で居らつしやいます』

と賞めました。

三人は、やがて勘定をすまして、宿を出てぶら〜行きますと、道傍に、緑の木の生ひ茂つた森がありました。

此時、鼻尾は他の二人に向つて、

『ねえ、君等、實に心持の好い森だね、僕は、何だか、斯ういふ所で、飛んでみたいやうな氣がするよ』

と云ふかと思ふと、忽ち、大きな鳥になつて、

『僕はこゝで失敬するよ』

と云つて、森の上へ飛んで行きました。

眼鏡と赤目兩人は驚いて、

『實に不思議な事があるものだ、鼻尾君は一躰どうしたんだらう』と、話しながら行きますと、廣々とした海のほとりに出ました。

すると、赤目は、眼鏡に向つて、

『ねえ、眼鏡君、僕はどうも、陸の上では、眼がかすんでしやう

三人 醫者

三人 醫 者

がないが、此の海の中へ入つて泳いだら、さぞ好い心持だらうと思ふが』

と云ひましたから、眼鏡君は驚いて、

『又君も變な事を云ふね、しつかりしたまへよ』

と云ふ内に、赤目は、

『僕もこゝで失敬するよ、左様なら』

と云ひ終るや否や、大きな魚になつて、ドブんと海へ飛び込みました。

眼鏡は、二人の友達が、妙な事になつてしまつたので、不思議に思ひながら、一人ポツポツ行くと、間もなく、一つの町へ入りまし

た。

あちらこちらを眺めて行く内に、或る時計屋の前へ來ると、急に欲しくて堪らなくなつたので、そつと左の手を伸して、上等の金側時計を掴んだ所を、店の人に見附けられて捕へられ、巡査に引渡されました。

三人共立派な醫者でありながら、こんな事になつてしまつたのは三人共、餘り自慢した罰であります。

燐寸賣少女

寒い風がビュー〜と吹き荒び、雪がコンコンと降つて、あた

燐寸賣少女

燐寸賣少女

りも暗くなつた大晦日の夕方、或る貧乏な家の少女が、帽子も被らず、靴もはかないで、燐寸を賣るために、アメリカの或る町を、あちこちと歩いてゐました。

少女が家を出る時には、お母さんの古い上靴の大きなのをはいてゐましたけれども、勢よく駆けて来る二輛の馬車を避けようとした途端、上靴はスツボリと脱げて、片方は見えなくなつてしまひ、片方は、いたづら小僧が持つて行つてしまひました。

それで少女は、跣足のまゝで、膝掛に少しの燐寸を包み、手にも一束持つて、『燐寸や燐寸』とあはれな聲で呼びながら、歩いてゐるのです。

朝から雪の中も厭はず、勉強して歩いてゐましたけれども、誰も燐寸を買つて呉れる者もなく、一錢のお錢を恵んで呉れる人もありませんでした。

家を出てから、少女はまだ御飯も喰べないので、お腹は空しくし、寒氣は寒し、顔色も青くなつて、這ふやうに歩いてゐると、雪は遠慮會釋もなく降りしきつて、少女の顔へ垂れ下つた黄色い髦の毛に白く積りました。少女は、つくづく悲しく思ひました。

けれども、燐寸の賣り切れない内に家へ歸れば、情けを知らないお父さんが、打つたりたゝいたりするばかりでなく、少女の家は、天井がなく、屋根の下に住むので、藁やぼろが、隙間に填めてはあ

燐寸賣少女

燐寸賣少女

つたけれども、風が吹き込んで、寒いから、少女は、家へ歸りもしないで、町の或る家と家との間の隅の所へ入つて、風や雪を凌ぎ、自分の身軀を縮めて、凍えて赤くなり又青くなつた兩足を、出来るだけ身軀の下へ入れたけれども、矢張り寒くて堪りませんでした。其の内に、少女の手は、寒さのために痺れてしまひました。若し少女が、燐寸を點して、其の火で指を暖めたらば、僅か一本の燐寸でも、随分爲になるでせう。

やがて、少女は、家の壁で、一本の燐寸を摺りますと、バツと火花が出て、此の不思議な焰は、丁度蠟燭のやうに燃えました。少女は、紅葉のやうな手を、火の上に翳して暖めました。此の僅かな火

も、此のあはれな少女のためには、ドン／＼燃えてる大きな暖爐の傍に坐つてるやうに、心持ちよく思はれました。

そこで、少女は、足を伸して暖めようと思いましたが、火は忽ち消えて、燃えさしの小片が手に残つたばかりでありました。

少女は又一本摺りますと、それが燃えて、家の壁を照らした時、少女の眼には、其の壁の中に、大きな室のあるのが見えました。

そして、そこには、ピカ／＼光る白布のかゝつた食卓があつて、其の上には、綺麗な陶器が乗せられ、焙きたての鶯鳥からは、煙が出てゐました。やがて、其の鶯鳥は、背中に小刀や肉叉を刺されたまゝ、食卓から飛ひ下りて、少女の方へ來ましたから、大さう面白

燐寸賣少女

燐寸賣少女

く思ひました。すると、忽ち火は消えて、あたりは、厚い冷い壁の外、何にもありませんでした。

次に又一本火を點けますと、此の少女が、耶蘇降誕祭（十二月二十五日）の時に、或る金持の家で見たよりも、もつと大きな常磐木の下に坐つてゐました。そして、其の緑色の枝の間には、蠟燭が何百本も點つてゐて、何時か、或る店先で見たやうな美しい畫が懸つてゐましたので、少女は大さう喜んで、両手を伸しますと、火は又フツと消えてしまひました。

少女は、更に一本の燐寸を摺りますと、其の光りの中に、少女の年老つたお祖母さんが、奇麗なやさしい顔をして、懐かしい姿で立

つてゐました。

少女は、餘りの嬉しさに、

『お祖母さん、早く私を連れて行つて頂戴な』
と叫びますと、

『此の燐寸が消えるぞ、お祖母さんも、暖爐や鶯鳥や常磐木のやうに消えてしまふのでせう』

し、悲しさに云ひました。

少女は、少しでも長く、お祖母さんを留めて置かうと思つて、手早く、残りの燐寸を點しました。すると、火はバツと燃え上つて、晝のやうに明るくなりました。此の時、お祖母さんの姿は、少女がこ

燐寸賣少女

燐寸賣少女

れまでに見た事もない程美しく見えました。そして、お祖母さんは少女をしつかり抱いて、高く天へ飛び上りました。少女は、此所で神様と一緒に居りましたから、もう、寒くもなければ、空腹じくもなく、又、恐ろしくもありませんでした。

翌朝、二軒の家の間の隅の所に、少女は、顔色は青ざめ、口元に微笑を含んで倒れておりました。少女は、大晦日の晩、寒氣のために凍死しましたので、新年の最初の日影が、燐寸をもつた少女の死骸を照しました。そして、一束の燐寸は、大方使つてしまつてありませんでした。

これを見た人等は、少女が燐寸で暖まつてゐたと云つたけれど、

少女がどんな美しい幻影を見たか、又、どんな立派な姿で、お祖母さんと一緒に、楽しい新年を迎へたかは、誰も知る人がありませんでした。

森 の 家

昔、西洋の或る所に、一人の農夫があつて、永い間、一疋の驢馬を飼つてゐましたが、漸々年を老つて、役に立たなくなつたからかはゆさうだけれども、殺してしまはうと思ひました。ところが、此の驢馬は大さう賢くて、何時の間にか、主人の心を悟つてびつくりし、

森 の 家

森 の 家

『これは大變だ、ぐづぐづして、は殺されてしまふ、命あつての
 物種だから、これから都會へ出て、立派な音樂師になり、諸國を廻
 つて、面白く暮さう』と思つて、主人の家を飛出して、都會の方へ
 急ぎました。

やがて二三町も來ると、一疋の犬が、苦しうな呼吸をしながら、
 道傍に倒れてゐますから、氣輕な驢馬は、

『オイ犬さん、何故そんなに苦しうにしてるんだい』
 と尋ねますと、犬は、

『オ、驢馬さんか、マアきいて呉れ、僕 漸々年を老つて、近頃
 じゃ、獵の役に立たなくなつたといふので、毎日のやうに主人に撲

たれて、辛くてしやうがないから、家を飛出して、此所まで來たけ
 れど、お腹は空しくし、身軀は疲れるし、この先、どうして暮さうか
 と思ふと、つくづく世の中が厭になつてしまふのさ』

『フーム、それだけでそんなに落膽したのか、君も随分意氣地が
 ないね、そんな弱い音をふかないで、僕と一緒に町へ行つて、立派
 な音樂師にならうじやないか』

と驢馬が云ひますと、犬も其の言葉に従つて、これから二匹連立
 つて出掛けました。

少し行きますと、一匹の猫が、さも悲しうな顔をして、道の真
 中に坐つてゐますので、

森 の 家

『オイ老婆さん、何をそんなに心配さうな顔をしてるんだい、まるで腑抜のやうだせ』

と驢馬がききますと、猫の老婆さんは、

『そりや其の筈です、死ぬか生きるかの堺ですもの』

と答へました。驢馬は、

『ホーそりや大變な騒ぎだね、一躰老婆さん、そりやどうしたわけなんだい』

『マア、きいて下さい、私も御覽の通り年を老つて、危い藝當をして、鼠を捕るより、爐の傍で居眠りでもしてゐた方が樂ですから、つひそれをやつて、主婦さんに見附かつて、頸つ玉を持つて、川の

中へ投げ込まれかけたのを、一生懸命で主婦かんの手を引搔いて、こゝまで逃げては來たものゝ、こんな老婆さんになつては、かはゆがつて呉れる人もないから、これから先、どうしたものかと心配してるんで、腑抜のやうにもなつたのです』

と、猫の老婆さんは涙をこぼしながら云ひました。

『それでは、お前さんも、私等と一緒に、町へ出て音楽師になるがいゝ。お前さんは女だから、人にはめられるやうになるだらう』
と驢馬がすゝめましたので、猫も大さう喜んで、二匹と一緒に行くことゝなり、三人づれではない三匹づれで、仲よく町へ向ひ、或る農家の傍を通りますと、一羽の雄鶏が、馬鹿に大きな聲で鳴い

森 の 家

てゐますので、例の驢馬は、

『オイ〜雄鶏君、馬鹿に大きな聲を出すか、一躰何事が持上つたんだい』

と尋ねますと。雄鶏は、

『持上つた所の騒ぎじゃない、今日は朝つから好い天気だから、洗濯するに都合がよからうと思つて、聲のかれるほど鳴いてるんだけれど、主人等はそれ程にも思はないで、今度の日曜日には、僕を殺して、お客の御馳走にしやうといふわけなんだ』

と答へますから、驢馬の老爺は、

『そいつは大變だ、まご〜してゐて、殺されるよりは、おれ等

と一緒に町へ行つて、音楽師になりな』

『そりや眞實だ、それではおれも一緒につれて行つてもらはう』
といつて、これから四疋の先生等は、がや〜騒ぎながら、町の方へ急ぎました。

やがて其の日も夕方近くなりましたから、一同は路傍の森の中へ入つて泊ることにしました。そこで、驢馬と犬とは、大きな木の根方を枕にして横になり、猫は又のある枝へ上り、雄鶏は木の頂上へ飛上つて寝ることになりました。

其の時、木の頂上へ上つた雄鶏が、四方を見渡すと、少し離れた所に、火影が見えましたので、下にゐる驢馬に向つて、

森 の 家

森 の 家

『ねえ大將、餘り遠くもない所に火が見えるが、あれは確かに家らしいせ』

『遠くさへなければ、其所へ行つて泊らうよ、何しろ、此所じや餘りひどいからねえ』

と驢馬が云ふと、犬は、

『ひどいのもいゝけれど、夕飯を喰べなくちや、お腹が空いて堪らない』

と云ひました。そこで四疋は、宿をかへることに相談をきめて、雄鶏が火影を見たといふ方へ進んで行くと、火影は漸々大きくなつて、終ひには、森の中の一軒家の窓から射す火影で、しかも其の家

は、盗賊の住所だといふこともわかりました。

皆の中で一番脊高の驢馬が、そつと窓からのぞいて見ると、二人の盗賊が、大きな食卓に對つて、おいしさうな御馳走を喰べて居り、其の傍には、立派な品物が澤山積んでありました。驢馬は小さい聲で、他の者等に此の話をして、四匹は、どうして中へ入らうかと色々相談した後、驢馬が後足で立ち上り、前足を窓に掛けると、犬が其の背中へはひ上り、猫が犬の肩へ飛び上り、雄鶏が幅の頭に舞ひ上つて、塔の化物のやうな形を拵へました。

そこで、驢馬が、後足でトンと音をさせると、一度に、キーンと、ニヤーンニヤーン、ケ、ツコーンと、出来るだけの大聲を

森 の 家

森 の 家

出して騒ぎ立て、窓のガラスを毀して、座敷の中へ跳り込みました。二人の盗賊は、驚いたの驚かないのではない、キャツと叫んで、逃げて行つてしまひましたので、一同は大さう喜び、食卓を取りまき、散々飲んだり喰べたりした上で、燈火を消して、驢馬は土間に積んである藁の中へ入り、犬は入口の戸の隅に蹲踞り、猫は竈の暖かい灰の中にすくみ、雄鶏は梁の上へ上り、皆がいゝ心持になつて、ぐつすり眠込んでしまひました。

やがて、夜も更けた眞夜中頃になると、驚いて逃げた盗賊等は、もう化物も行つてしまつたゝらうと思つて、そつと家の傍へ來てみますと、家の中は眞暗で、ひつそりかんとしてゐますから、少し氣

性の強い方の男が、もう大丈夫だらうと思つて、恐々ながら、手探りで家へ入り、臺所へ行つて、漸く一本の燐寸を探して、竈の中に火の残りでもないかと、のぞいてみました。

すると猫の老婆さんは、お酒に酔拂つて、暖い灰の中へ入つて、心持よく眠込みましたが、此時咽喉が渴いたので、眼を覺してみると、何か中をのぞき込んでゐますから、圓い眼玉を一層圓くして、ぐつと眺みつけました。すると盗賊は、それを火だと思つて、燐寸を突きつけましたから、猫も驚いて、盗賊の顔に飛びかゝり、思ひいれ引掻きました。

盗賊は肝を潰して、ドツサリ尻餅をついたまゝ、起き上ることも

森 の 家

森 の 家

出来ず、其のまゝ入口の方へいざつて行きますと、犬が大口開いて向脛へ噛みつきました。

盗賊は、キヤツと叫んで、土間に積んであつた藁の中へ轉げ落ちると、待ち構へてゐた驢馬は、後足をあげて、いやといふほど、盗賊の身軀を蹴飛ばしました。

雄鶏は梁の上で様子を見てゐましたが、此時、バタ／＼と翼叩して出来るだけの大聲で、『萬歳々々』と唄ひました。

散々な目にあつた盗賊は、びつこひき／＼、命から／＼青くなつて、友達のゐる所まで逃げて来て、

『どうも／＼、ひどい目にあつて來たせ、全く飛んだ化物に家を

取られてしまつた、おれが臺所へ行くとな、竈の中から、長い骨のやうな手で引搔きやがるし、逃げ出さうとすれば、入口に隠れてゐた奴が、小刀で向脛を突き刺しやがるし、土間へ落つこちりや、眞黒な奴が棒で突き飛ばしやがるし、やつと起きようとすりや、梁の上にもた化物めが、大きな聲で笑やがつた、眞實にこんな恐ろしい馬鹿々々しい目にあつたのは初めてだ』

と話しましたので、友達も、更に怖ろしがつて、二人は森の奥へ逃げ込んで、再び家へは歸りませんでした。

四正の先生等は、盗賊の家には、食物も澤山あるし、住むにも好い家ですから、町へは行かずに、此所で仲よく暮しました。めでた

西洋の占者

しく。

西洋の占者

或る時、一人の占者が旅をして、道の二條に分れる所へ來ましたが、自分の目的地へ行くには、どちらを取つていゝかわからなかつたので、其の傍に田を耕してゐる農夫に尋ねました。

農夫は、此の人が占者である事を知つてゐましたから、

『あなたは占者でありながら、此の道がわからないやうな事での人の身の上の判断が出來ますか』

と云ひますと、そこは、さすが占者ですから、ぬからぬ顔で、

『そりや云ふまでもなく、私ちやんと判断したんだが、其の判断には、農夫に尋ねよといふ事だから、それでお前さんにきいたのだ』
と答へました。

金魚の大王

昔、支那が唐といつた代に、太宗皇帝といふ天子があつて、此の頃、兩天竺(今の印度)に、お釋迦様のお寺で、大雷音寺といふがあり、其の寺に、三藏經といふ尊いお經がありました。

太宗皇帝は、此の三藏經を唐へ取り寄せて、佛教を弘めようと思

金魚の大王

金魚の大王

はれ、度々、僧侶を西天竺へ遣られましたけれども、或は途中で猛獸に喰はれたり、或は盜賊に殺されたりして、歸つて來る者はありませんでした。

皇帝は、ひどく残念に思はれて、南海の觀音様に願をかけて、どうかお經を取り寄せさせ給へと祈られました。すると、或る夜皇帝の夢に、觀音様が現はれて、

『お前の願ひによつて、三藏經を唐へ取寄せられるやうにしてあげるから、寶林院の玄奘といふ者に其の使ひを云ひ付け、此の二品を玄奘に持たせてやれ』
と云つて、日に三度光りを放つ袈裟と、錫杖（僧侶のつく杖）と

を渡されました。

皇帝が眼を覺されると、右の二品が手に在りましたから、大さう喜ばれ、翌日、寶林院といふ寺の玄奘といふ僧侶を召し寄せて、西天竺への使を云ひ付けられ、觀音様から授けられた二品と、立派な馬とを賜はりました。

此の玄奘は十八歳の時に僧侶になり、三千八百人の學者の中で、一番偉い學者でありまして、三藏經を取りに行くといふので、三藏法師と呼ばれました。

三藏法師は、天子から賜つた袈裟を掛け錫杖を持つて馬に乗り、八人の弟子をつれて、唐から西天竺をさして出掛けました。時は唐

金魚の大王

金魚の大王

の貞観十四年三月の事です。

九人の者は、山を越え川を渡つて、先の長い旅を続けましたが、かはゆさうにも、八人の弟子は皆虎め餌食となつて、玄昇法師一人となりました。

けれども、好い鹽梅に、途中で、孫悟空といふ弟子が出来ました。此の者は、身軀が七十二色にかはり、耳には、魔法を使へば、七八尺の鐵棒になる針を持ち、一呼吸に十萬八千里を走る雲に乗るといふ、まことに、たぐひのない不思議な者で、しかも其の正躰は猿であります。

又行と、八戒といふ者が弟子になり、三番目には、龍沙川の邊で

沙悟淨といふ者が弟子になりました。八戒の正躰は猪で、沙悟淨の正躰は海坊主であります。

玄昇は、新しい三人の弟子をつれて、漸々西の方へ進んで、支那の里數で二千八百里(支那は六町を以て一里と定めてあります)距つた通天河といふ川の邊の或る村へ着いたのは、秋も半ばの八月或日の夕方でありましたから、三人は、村長の陳清といふ人の家を頼んで泊めてもらひましたところ、主人の陳清はじめ、家内の者等も皆涙ぐんでゐますから、不思議に思つてわけを尋ねると、此の村から三十町程川上に、靈感山といふ山があり、そこに靈感大王といふ魔神の社があつて、毎年二月と八月には、十歳以上の男の子と、十

金魚の大王

金魚の大王

歳以下の女の子とを二人づゝ、人身御供に上げることになつてゐて、若し上げなければ、村中焼かれてしまふので、今度は、陳清の子の十歳になる男の子と、陳清の弟の子の、八歳になる女の子とが番に當つて、今晩上げるのだといふ事でありませうから、

玄昇は此の話をきいて、かはゆさうに思ひ、ほろ／＼涙をこぼして居ります。此時孫悟空は、

『それなら御心配なさるな、私等が、子供衆の代りに行つて、魔神を退治て上げませう』

と云つて、自分は男の子に化け、八戒を女の子に化けさせ、これから、二人は二挺の輿に乗り、村の者等に釣られて、靈感大王の社

へ行きました。

村人は、社の前に二挺 輿を下して、恭しく社を拜んで、

『大王様、お定りの通り人身御供を差し上げますから、どうか村を静穏にして下さいまし』

と頼む、男の子には桃と柿、女の子には菓子と菓子を呉れて、皆歸つて行きました。

孫悟空と八戒とは、輿の中で、話をしながら、果物や菓子を喰べて居る内に、夜も漸々更けてきました。

やがて、真夜中頃になると、俄かに腥い風がサツと吹き起つて、谷間から黒雲が巻き上り、山がゴ／＼と鳴り渡つて、其の物凄さ

金魚の大王

金魚の大王

は、たとへるにもものもありません。其の時、ドスン／＼と足音荒く踏み鳴らして、現はれ出た化物は、身の丈一丈五六尺、顔の長さ二尺餘り、眼はギラ／＼として鏡の如く、顔は棗のやうな色で、髪の毛は、銅の針を植ゑた如く、二尺餘りも地に垂れて、實に身の毛もよだつ程恐ろしい姿で、いふまでもなく、これは靈感大王であります。

大王は二股の劍を持つて、輿の傍へ寄つて来て、二人に名と年とを尋ねましたから、二人は、各々子供の名と年とを云ひました。

此の時大王は、女の子がムシャ／＼お菓子を喰べてるのを見て、『此の女の餓鬼は太い奴だ、今年は此奴から先に喰つてやらう』

と、輿の戸を開けたので、八戒は輿から飛出して、一丈餘りの白い毛の猪となり、豫て用意をして來た鐵の熊手を持つて、大王に打ち掛りました。すると大王は、

『おのれ、憎い獸類めッ』

と、二股の劍で相手になり、チャン／＼と打ち合ひましたが、八戒の方が危くなつたので、孫悟空は大猿になつて輿から飛出し、耳の中から針を取出して、魔法を使ひますと、忽ち七八尺の鐵の棒となつたので、孫悟空は之を以て靈感大王に打ち掛りました。

さすがの大王も、二人には敵はないので、ドン／＼逃げ出しました。二人は逃がすまいと、跡を追駈けて、通天河の岸まで來ると、

金魚の大王

金魚の大王

靈感大王は、劍を口にくはへ、身を躍らして、ドブンと水の中へ飛び込みました。

靈感大王の眞實の住所は、通天河の水底の水簾洞といふ所で、此所には、大勢の家來もありませんから、孫悟空と八戒とに追駈けられて、川へ飛び込み、自分の家へ歸り、家來等に、有し次第を話しますと、一人の家來が、

『御頭、それは三藏法師の弟子で、孫悟空と八戒との二人で御座いませう、三藏法師の肉を喰ふと、三千年も壽命が延びるさうですから、明日は計略を以て、法師を生捕りませう』
と云つて、魔法をつかひますと、アラ不思議や、通天河は一面に

氷がはりました。

翌朝になると、大王の家來等は、旅人や馬士になつて、氷の上を渡りますから、三藏法師は之を見て、主人陳清に尋ねると、もう八月の事で、氷のはるの不思議はないと云ひましたから、三藏法師は安心して、三人の弟子をつれて、陳清の家を出かけますと、村の人々も送つて来て、川端で別れて歸りました。

四人は、氷の上を渡つて進みましたが、何しろ、海のやうな大きな河ですから、直に渡る事は出来ません。其の内に日も暮れて、月も出ましたが、これは又奇躰にも、今まで歩いてゐた旅人等が、バツタリ見えなくなると、氷をはらせた大王の家來が、魔法をもとし

金魚の大王

金魚の大王

ましたから、氷がとけて、三藏法師は水の中へはまりますと、靈感
大王は、法師を捕へて、水簾洞へ引張り込みました。

三人の弟子は驚きました。沙悟浄は海坊主ですから、直に水底
へ入つて、師匠を助けようとしたが、何しろ、敵は大勢で固めて
るから手も出せない。外へ来て、此の事を二人に話すと、それ
ではといふので、孫悟空は、二人を陳清の家へ戻らせ、自分は雲に
乗つて、南海の観音様の所へ参りますと、此時、観音様は、お堂の
傍の簾の中へ入つて、籠を編んでお居でになりました。

観音様は、孫悟空を見て、

『オ、悟空か、お前が来るだらうと思つて、籠を作つてるのだ、

お前の師匠の玄奘が、靈感のために、水の底へ引込まれたから、助
けて貰はうと思つて私を頼みに来たのだらう』

孫悟空は観音様がよく知つてお居でになるのに感心して、

『さやうで御座います。併し其の籠は何のためになさるので御座
います』

と尋ねますと、観音様は、

『これで靈感を掬ひ出すのだ、あれはもと、私の家の池にゐた八
寸ばかりの金魚で、三年前の洪水の時に飛出して、今では通天河の
主になつてゐるのだ。今私が行つて掬ひ上げるから、お前は水簾洞
へ行つて、靈感を水の上まで誘ひ出しなさい』

金魚の大王